

日本語教育を軸とした相互交流促進のための 外国人教員短期招聘事業

福岡昌子

Acceptance of Foreign Teachers on Short-Term Invited Programs to Promote Mutual Exchange Centered on Japanese Language Education

FUKUOKA Masako

〈Abstract〉

We planned and implemented acceptance of foreign teachers on short-term invited Programs as part of the “Mutual Exchange Promotion Project Centered on Japanese Language Education at the Center for International Education and Research and Organization for the Development of Higher Education and Regional Human Resources”.

We invited Mrs. Cai Yan-Yan, a lecturer in the Department of Japanese Studies, College of Foreign Languages, Guangxi University, China to stay at Mie University for about a month from July 16 th to August 15 th, 2019. Mainly, Mrs. Cai participated in the following mutual exchange projects: (1) Participation in Japanese language education classes, (2) Participation in guidance of the Center’s events, (3) Workshops sponsored and led by Mrs. Cai Yan-Yan: “Knowing China!, Language Education in China, Cashless Payments, and The One Belt, One Road Project”.

In the future, we will continue to invite young Japanese language teachers for a short period of time and implement a mutual exchange promotion project centered on Japanese language education with the aim of continuously increasing the number of international students at our university and strengthening cooperation. We will furthermore commit to further and deeper development with partner universities.

キーワード：外国人教員短期招聘事業、協定校、相互交流、留学生、日本語教育

1. はじめに

三重大学では、毎年海外の協定校へ教職員派遣や学生派遣、海外からの研究者受入れ事業を行ってきた。2019年度は国際交流事業経費の助成を受け、国際交流センターの教員4名がそれぞれの国際交流事業を実施することになった。筆者は、外国人教員短期招聘プログラムである「国際交流センター・地域人材教育開発機構と三重大学協定校における日本語教育を軸とした相互交流促進事業」を企画・実施した。本稿ではその事業報告を行う。

2. 事業概要 (目的)

国際交流センター・地域人材教育開発機構と三重大学協定校による「日本語教育を軸とした相互交流促進事業」は、以下の目的で実施した。

- ① 海外の協定校との相互交流と連携強化
- ② 本学への留学生の継続的な増加
- ③ 海外における若手日本語教育者のための「再教育の場」の拠点化
- ④ 留学生を送り出す海外の協定校との相互交流と連携強化
- ⑤ 海外の協定校の日本語教育状況の把握と情報交換
- ⑥ 受入れ海外教員予定者の母国の社会やその国における日本語教育事情の把握

3. 事業の背景と経緯

3.1 事業の背景

表 1 は、2011 年より 2019 年までの三重大学協定校別交換留学生の受入れ総数である。この総数は大学院生や正規生、研究生を省いた数であるが、三重大学ではこの 10 年間に協定校の数も増え、交換留学生も大幅に増加した。

表 1 を見ると、着実に交換留学生の受入れ総数は増加傾向にあるが、本学への交換留学生の送り出しが近年ストップしている大学があることもわかる。ノースカロライナ大学ウィルミントン校 (アメリカ)、タスマニア大学 (オーストラリア)、スラナリー大学 (タイ)、リヨン大学 (フランス)、ハバロフスク国立経済法律大学 (ロシア)、梨花女子大学 (韓国) 他である。この要因には、担当教員の異動・退職による要因が考えられるが、受入れがストップしている要因を検討し、受入れ継続の再開が望まれるところである。

3.2 協定校における日本語教育への貢献

交換留学生は、渡日後に国際交流センターの日本語レベル判定試験を受験することになっているが、協定校から来る交換留学生は、全体の傾向として日本語レベルが年々高くなってきている。近年の日本語レベル判定試験の結果を見れば、どの協定校の学生がどの日本語レベルのクラスに配属されるか、例年ほぼ決まった傾向が見えてくる。特別聴講学生それぞれの日本語レベルのばらつきは当然あるが、日本語レベルが比較的高いクラスに配属される協定校と、比較的低い日本語クラスに配属される協定校に分けられる。

前者の協定校の場合、多くが日本語母語話者の日本語教師を専任教員として雇用し、日本語教育が行われているようである。一方、後者の協定校の場合は、日本語母語話者の日本語教師による指導は行われていないように思えた。協定校からの交換留学生がもう少し

のはどうかと検討を始めた。また、一定期間受け入れることで、本学の日本語教育状況や交換留学生在が過ごす本学の住環境、地域の特徴や文化を協定校に知ってもらう一つの機会になるのではないか、そのような思いから本事業を開始することにした。

3.3 広西大学(廣西大学)との国際交流

本事業を実施するにあたり、いくつかの協定校に本事業について連絡をし、若手教員を派遣できるか協定校に打診した。短期間に協力要請を行い、若手教員の派遣協力を得ることができたのは広西大学だけだった。広西大学は例年日本語レベルが高い交換留學生を送り出す協定校である。

広西大学との大学協定(一般協定・学生交流)は、1999年2月22日に成立して以降、毎年多くの留學生を受け入れてきた。2011年には、広西大学の日本語教育教員の張貴生教授を1年間受け入れ、学術的な研究交流も行われた。近年、中国からの留學生数は減少傾向にある中で、広西大学からは継続的な交換留學生の受入れがある。下記が広西大学と国際交流センターによる主な交流実績である。

- ① 毎年多くの留學生を受け入れている(1999年以降交換留學生14名の受入れがあった)。
- ② 国際交流センターでのサマースクール実施時(2007年・2008年)においても、複数の留學生が参加した。
- ③ 2011年には広西大学教授の張貴生氏を受け入れ、学術的な研究交流が行われた。
- ④ 日本語日本文化研修生受入れ事業が発足して以来、広西大学より多くの日本語日本文化研修生を受け入れてきた。
- ⑤ 近年、Tri-U (Tri-U International Joint Seminar & Symposium)における研究交流が行われている。広西大学は2018年にTri-Uホスト校として迎えられた。

国際交流センターで外国人教員短期招聘プログラムを実施するにあたり、受入れ期間については、当初より2019年7月から8月の1か月を検討した。7月から8月の期間は、海外の協定校教員にとって本務校での長期休暇を使うことができるため、渡日するのに最適な時期であると判断した。

派遣教員として渡日した蔡艷艷先生は、2005年12月中国広西南寧市広西大学外国語学院大学院で修士号を取得し、2006年より広西大学外国語学院日本語科に所属する日本語教員である。2007年から1年間、国際交流員として熊本県の市役所の国際交流課で勤務した経験があった。蔡先生は、下記の日程で招聘プログラム相互交流事業にご参加いただいた。

4. 2019 年度協定校における日本語教育を軸とした相互交流促進事業の実施報告

4.1 招聘期間および招聘期間における主な業務

① 招聘日程：2019 年 7 月 16 日（火）～8 月 15 日（木）

② 招聘期間における主な業務：

i) 日本語教育科目への参画

国際交流センターの初級集中基礎 I、初級集中基礎 II、初級集中基礎 III、中級 I、中級 II、上級クラスの授業見学、期末試験の採点補助業務など。

ii) 国際交流センター・地域人材教育開発機構における行事への参加・引率：

- ・ 7 月 18 日（木） 蔡先生着任式
- ・ 7 月 22 日（月） センター教員主催の講演会への参加
- ・ 8 月 3 日（土） 地域との国際交流（盆踊り大会）の引率
- ・ 8 月 7 日（水） ワークショップ開催（4.2 参照）
- ・ 8 月 9 日（金） 日本語日本文化研修生修了式への出席、蔡先生の離任式

iii) 広西大学日本語教員蔡艶艶氏主催のワークショップ開催：「現在の中国を知る（中国の語学教育、キャッシュレス化、一带一路計画について）」（2019 年 8 月 7 日（水）9・10 限「留学生と学ぶ日本」）

iv) その他：国際交流センター日本語レベル判定試験問題の作成（中級 II）

4.2 蔡艶艶氏主催のワークショップ：「現在の中国を知る（中国の語学教育、キャッシュレス化、一带一路計画について）」（2019 年 8 月 7 日）

4.2.1 ワークショップ実施内容

蔡艶艶氏のワークショップは、①講演会の開催、②日本人学生と留学生による「ディスカッションで参加するワークショップ」の 2 部構成とした。ワークショップのテーマは、日本人学生にとって中国の現在の状況についてあまり知見がないと思われるテーマを選んだ。「日本人が知らない？中国の今」と題し、①中国のキャッシュレス化社会…「日本でキャッシュレス化を進めるためには？」、②中国の一带一路政策とは？…「日本はどう参画すべきか？」という小テーマで、「ディスカッションで参加するワークショップ」を開催した。以下、蔡艶艶氏の講演内容を記載する。

4.2.2 中国のキャッシュレス化社会

皆さんは今買い物をするときどういうふうにお金を支払いますか。よく利用されるのは現金とかクレジットカードのようなものですね。ここで紹介したいのは、中国のキャッシュレス化です。つまり、ほとんど現金を頼らずに生活するということですね。いま中国の都

市部で、というかとても田舎でないかぎり、キャッシュレスの生活がとても速いスピードで進んでいます。キャッシュレスの生活はどういうふうを支払うかというと、ほとんどはモバイル決済を利用しています。いま中国でよく利用されている電子マネーは二つあります。アリペイとウィーチャットです。アリペイは、中国企業のアリババグループが 2004 年に開始した電子マネーです。当初はネット通販での支払いで使われていましたが、いまモバイル決済の主な手段として利用されています。ウィーチャットはもともとチャットのアプリなのですが、利用数が多く、支払い機能を導入してから、利用する人もどんどん増えています。中国国内のデビットカードを紐付けておけば、いつでもどこでもスマホ一つで支払いが可能なのです。

つまり外出時に、スマホさえあればなんでも出来る！というわけです。大変便利です。

使い方も大変簡単です。レジに商品持って行く→アリペイで支払うことを告げる (QR コードの画面を見せるだけでも可能) →スマホ画面上の QR コードをスキャンしてもらう or スマホで店舗 QR コードをスキャンし金額を入力後パスワード入力→決済完了！です。

では、中国でモバイル決済はどれだけ普及してるのかというと、日銀レポートの 2017 年のアンケート調査によると、中国でのモバイル決済普及率は 98.3% だそうです。これはかなりの数字ですよ。私もこの数字を初めて見たときびっくりしました。モバイル決済はほとんど全ての商店で使えます。中国語の中で、人の生活の各方面を四つの漢字にまとめています。それは「支持付宝、美新支付」です。服や食べ物はもちろん、住所にかかわる各方面、あるいは出かけるときの交通手段、すべてキャッシュレスで、携帯一本だけですみます。例えば、

食事、市場での買い物…などすべてモバイル決済でやってます。近年、日本に来る中国の観光客が増えています。そのため、アリペイのようなモバイル決済が利用できる店舗も広がっています。これは観光客にとっても本当に便利ですね。

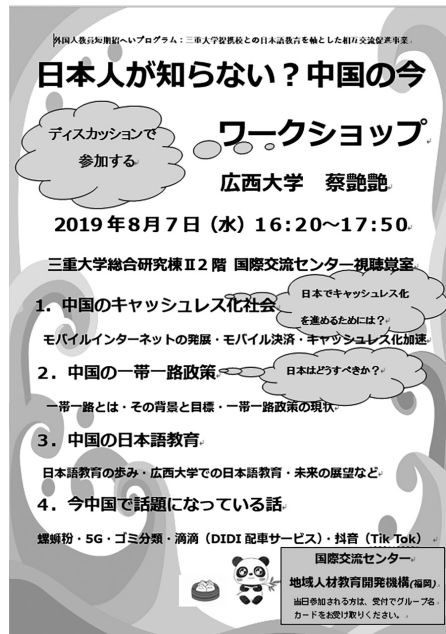


図 1. ワークショップ「中国の今」ポスター



図 2. ワークショップでの講演 (蔡艶艶)

モバイル決済、キャッシュレス化は確かに中国で広がっています。ちょっと出かける場合は、ほとんどの人が持っているのはスマートフォンと鍵だけです。その良し悪しと言えば、いいのはやはり便利な点でしょう。財布もないので、荷物が少なくなるからです。例えば、小銭がいっぱいになることは避けられますよね。よくない点は、セキュリティの問題とか、個人情報の洩れの恐れとか、お金を使った実感がなくて無駄使いになるとかという問題もたくさん挙げられます。では、日本の場合はどうかも一緒に見てみましょう。同じ日銀レポートの統計なんですけど、日本は6%で、割と低いんです。別の機構のアンケート調査ですが、なぜ利用しないかの理由をご覧ください。日本でキャッシュレス化がそんなに広がっていない理由として、次のような理由があるかもしれません。現金主義で、お金を使った実感が大事だとされています。そして、クレジットカードの利用もとても便利ですし、セキュリティの不安もあり、わざとモバイル決済を使わなくてもいいと考えられます。また、個人情報の洩れの可能性もあるから、プライバシーを大事にしている日本の人々は利用を拒む一因になるかもしれません。

以上のことから、1つ目のディスカッションテーマは、「日本でキャッシュレス化を進めるためには何が必要か。どのようなことをもっと進めるべきか。そもそも日本社会にキャッシュレス化は必要か」です。

4.2.3 中国の「一帯一路」計画について

次に、今日の二つ目のテーマに行きます。皆さんは「一帯一路」って聞いたことがありますか。実は、それは中国が進める経済圏の構想です。まず歴史的な背景を見てみましょう。

中国とヨーロッパの間ではるか昔から、貿易が盛んに行われてきました。中国の絹がヨーロッパ大陸にたくさん運ばれたことから「シルクロード」と呼ばれ、一般的には中国の長安（現在の西安）からローマを結ぶ貿易の道を指します。一帯一路はいわば、「現代のシルクロード」だと中国政府は言っています。2013年秋に、習近平国家主席が中国から中央アジアを通してヨーロッパに至る「陸のシルクロード」に加え、南海やインド洋を通してヨーロッパ、アフリカなどに至る「海のシルクロード」を再現する構想を打ち上げました。中国政府は陸の経済圏を「一帯」、海の経済圏を「一路」と名付けました。この二つを合わせて、中国語で「一帯一路（イータイイールー）」、英語では“*One belt, One road*”と呼ばれています。

中国とヨーロッパの間にある中央アジアや中東などの国々は、道路や鉄道、港湾、通信網といったインフラが足りていません。これらを整備して、貿易や交通を便利にすることを目的に掲げています。このお金を出すため、中国はアジアインフラ投資銀行（AIIB）をつくり、シルクロード基金と呼ぶ資金も用意しました。一帯一路に参加する国々の間で、

投資や貿易の自由化を進めることも目指しています。どうして中国はこの構想を出したのかというと、いろいろな理由が取り上げられます。例えば、GDP の増えるスピードが緩やかになったので、新しい利益成長点を探さなければなりません。また、国内の過剰な生産能力の緩和にも繋がってます。また、中国の経済発展は地域の差が著しく、この計画によって、西部地域の経済発展を狙っています。そして、経済圏内の国々の資源がゆたかで、それも中国のエネルギー安全保障にかかわっています。現在、この一帯一路計画に何カ国が参加しているのでしょうか。2015 年の参加国は 60 カ国ほどでしたが、今年 3 月の記者会見で王毅外相が明らかにしたところによると、123 カ国まで増えています。

この構想は、現在どうなっているかということ、さっき言った通りにこの構想も実はいろいろな困難に面しています。①一帯一路構想該当地域における宗教・文化・民族の多様性と政治的不安定性により、協力関係の構築が難しいです。計画の広大さゆえに沿線諸国には様々な国が含まれるから、利害関係の変化とか民族間の摩擦とか治安の悪化などの可能性があります。②こんなに大きな投資をして、その収益の予測は難しく、もしかすると、万が一の場合は世界規模の金融不安が起こるリスクもあります。③中国の過剰生産物を消化しようとする事へ、当該地域の雇用創出・技術移転に結びつかない形で開発が行われると、中国側の一方的な利益になる懸念もあります。④また、中央アジアや南アジアへの進出、資源をめぐる利益の衝突など、米国、EU、日本ロシアやインド、その関係がかなり複雑です。

一帯一路構想は、実に様々な意味づけがされており、現時点で正確に評価することはできません。しかし、国際公共財という視点を通じてはっきり言えることとしては、現在の世界政治経済秩序へ挑戦しようとしている面も否定できないが、貿易、投資、援助を通じて、自国の利益を考慮に入れつつも、周辺国へ貢献しようとしている面もある、ということです。

今年の三月、「一対一路」の国際会議が北京で開催されたが、中国による「世界制覇」を警戒する米国は構想に冷ややかで、今回も会議に高官を派遣しませんでした。米国と中国産品に追加関税をかけることなど、両国は貿易摩擦の状態が深刻になっていきます。そして、この構想に対し、日本の立場はちょっと微妙です。アメリカと同盟関係の日本なんですが、安倍首相がイタリアでの首脳会談で、日本の一帯一路協力にあたっての条件について、(1) 対象国への適正融資 (2) 開放性 (3) 透明性 (4) 経済性—という四つの条件を列挙し、日本自らの立場を明確にするとともに、米国の懸念にも配慮を示しました。

現在の一帯一路構想の状況について、日本の状況を含め、簡単ですが説明させていただきました。2 つ目のディスカッションテーマは、「日本は今後中国の一帯一路構想にどの

ように関わるべきだろうか」です。少し難しいテーマかもしれません。

4.2.4 「ディスカッションで参加するワークショップ」

4.2.2-3 に示したように、蔡艶艶先生から、1. 「中国のキャッシュレス化社会：モバイルインターネットの発展・モバイル決済・キャッシュレス化加速」、2. 「中国の一带一路政策 一带一路とは：その背景と目標・一带一路政策の現状」について、パワーポイントを使ってわかりやすく説明いただいた。まさに「日本人が知らない？中国の今」を知ることができた。

その後、参加者が5グループに分かれて、1「日本でキャッシュレス化を進めるためにはどうしたらよいか」と2「中国の一带一路政策 日本はどうすべきか？」のどちらかのテーマを選び、ディスカッションを行った。そして、40分のディスカッションを経て、自分たちのグループの結論をパワーポイントにまとめ発表した。1グループが6～8名で、全部で7グループが構成された。全部のグループが、前者の1「日本でキャッシュレス化を進めるためにはどうしたらよいか」を選んだ。

結果については、人文学部法律経済学科の深井英喜教授のご協力を仰ぎ、入賞チームの発表とコメント、現代中国の動向についてお話しいただいた。広く宣伝したわけではなかったが、留学生、日本人学生、市民など、合計55名の参加があり、大変白熱したディスカッションとなり、盛況なワークショップとなった。



図3. ワークショップ：ディスカッション風景およびグループ発表風景（優勝チーム）

5. 「三重大学協定校における日本語教育を軸とした相互交流促進事業」への参加報告

5.1 本事業へ参加して

「三重大学協定校における日本語教育を軸とした相互交流促進事業」に参加された蔡艶艶先生から率直な本事業の感想についてお伺いできたので、以下掲載する。

福岡先生と張貴生先生の紹介のおかげで、昨年度（2019）の三重大学の招聘事業に参加

した。広西大学で日本語の授業を担当している者として、今度の三重大学の日本語教育の現場を見学させていただき、授業や講演に参加できとても勉強になった。

まず、授業の内容の作成や、やり方などとても参考になった。中国で授業をするとき、決まった教科書を使うのは普通のことであるが、今回の見学で、先生たちは違う教科書を利用して、さまざまなテーマに応じて授業内容を自分で作成していることがわかった。この方法の方がもっと学生の日本語レベルに応じられ、学生の参加意欲も向上できると思いった。また、先生からの説明の後、学生が実際に日本語を使って練習させることに重点を置くのもので、とても印象的でした。授業の後も、先生方と日本語教育について意見交換や交流を行って、いいアドバイスを多くいただけた。

また、ワークショップを通じて、現在の中国の今というテーマで、今の中国で流行っていることや問題になっていることなど、資料配布の形で、参加する学生や市民の皆さんに紹介することができた。今回のワークショップを通じて、現在の中国の今を、日本人学生に知ってもらえることはありがたいと思った。また、ワークショップで「一带一路」のことや、キャッシュレス化について、学生たちの発表を聞き、専門家のコメントもいただいた。いろいろな立場からの意見や考え方がわかり、とても面白かった。ディスカッションを通して、文化交流の一機会となったと思う。

そして、三重大学実施による日本語レベル判定試験問題の作成の補助業務にも参加しました。試験問題のこのような作成方法が初めてだったので、いい経験になった。授業の時間以外も、神社の観光、講演や地元の行事に参加して、身近に日本文化を体験して、とても楽しかった。

三重大学での見学はもともと一か月ぐらいの予定だったが、入国審査の手続きはトラブルがあって、一週間ぐらいの渡日遅れとなった。また、事業の後半は、日本の期末試験の時期で学生たちの授業はほとんど試験段階に入る日本の期末試験の時期と重なり、さらに、日本のお盆の時期にもぶつかり、いろいろな事情で、見学できる時間が短くなってしまった点が少し残念なところとなった。

総じていえば、三重大学の招聘事業に参加でき、とても有意義な時間を過ごすことができた。いろいろ勉強と経験ができて、感謝の気持ちでいっぱいである。中国における日本語教師として、普段はやはり授業がありますから、夏休みを利用して見学するのはとてもいいチャンスだと思った。今後もこの事業をぜひ継続してほしいと思う。

5.2 受入れ側として

まず、本事業の招聘事業のご協力にご快諾くださった広西大学および蔡艶艶先生に心よ

り感謝を申し上げたい。当初は、4月に企画し7月中旬実施となると時間がなく、どの程度実現できるかわからなかった。数校に本事業について打診したものの、該当する若手教員が不在であるとか、派遣手続きが難しいという回答が多かったからだ。そのような中で広西大学にご協力いただいて実施することができ、大変有り難かった。

また、以前より協定校の先生方が、三重大学の学習環境や国際交流センターで行っている日本語教育の授業について、どのくらいご存知かお聞きしてみたいと思っていた。今回国際交流センターの日本語教育コースの授業カリキュラムや指導内容、教科書、非常勤講師を含む先生方の授業風景を初めて海外の協定校の先生に見ていただき、意見交換もできてよかったと思う。さらに、蔡艶艶先生には国際交流センターの行事や地域との国際交流にもご参加いただき、交換留学生を送り出す側および受入れ側の双方にとって意義ある体験となった。

蔡先生によるワークショップは、現在の中国社会のキャッシュレス化や一帯一路政策など日本人学生にとって関心が薄い事項であったにもかかわらず、わかりやすくご説明いただいたので講演の後のディスカッションも活発に行われた。講演やディスカッションを通して、学生達の知見を広め意見交換ができたことは、日本人学生と留学生にとって「中国の今」を身近に知る貴重な体験になったと思う。

ところで、国際交流センターでは、この10年筑波大学が提供するJ-CAT (Japanese Computerized Adaptive Test)を使って、留学生の日本語能力を測り各学生が所属する日本語クラスを決めていた。しかし、2019年度から国際交流センター独自の試験問題を作成し、日本語レベル判定試験を実施しようということになった。蔡先生が滞在した時期はまさにその準備段階の時でもあった。そこで、蔡先生にも日本語レベル判定試験の問題作成にご協力いただき、複数の試験問題を準備することができた。その後、新型コロナウイルスの影響により、2020年前期は対面の日本語レベル判定試験が実施できなくなり、急遽オンラインによる日本語レベル判定試験に切り替えて実施せざるをえなくなったが、無事2020年の日本語レベル判定試験を実施することができた。

さらに、本事業を展開する時期として、7月～8月に実施してよかったと思う。この時期は、海外の大学では夏季の長期休暇を経て9月からは新学期に入る大学も多く、日本では各地で祭り等が開催され、日本文化を体験するには絶好の滞在時期である。蔡先生も日本の夏を満喫していただきよかったと思う。ぜひ次回も海外の教員が長期休暇を利用できるこの時期に招聘して、日本語教育に関わる相互交流事業を継続したいと思う。

6. 本事業の意義および今後日本語教育を軸とした協定校との国際交流の展開について

本事業は他大学の国際交流事業においても実施報告の事例がない独自の事業であるため、本事業を継続することによって、本学の海外の協定校との相互交流や連携強化、本学で学ぶ留学生の継続的な増加が見込まれるのではないかとと思われる。協定校の日本語教育の状況については、渡日する交換留学生の日本語の習得状況から自ずと理解できるところであった。しかし、実際に協定校の教員の招聘を行って相互に日本語教育の指導方法について情報交換し合ったことは、協定校の日本語教育の状況把握だけではなく国際交流センターの日本語教育の授業体制の見直しにも生かせることができたと思われる。今後も本事業を他国の協定校に広め発展させていきたいと思う。また、世界の著しい社会変化の中で、協定校の教員から各国の状況について日本語で話を伺う機会は少ないので、日本人学生には貴重な話が聞けるいい機会になっていくと思われる。

本事業の実施意義については、次の 7 点が挙げることができるとと思われる。

- ① 協定校の日本語教育を担当する教員に授業や講演、行事に参加していただくことで、本学の日本語教育の現場を協定校の教員に知ってもらえてよかった。
- ② 海外の協定校における日本語教育の状況が把握できた。
- ③ 招聘教員によるワークショップを通じて、現在の中国の今について日本人学生に知ってもらえるいい機会となった。
- ④ 留学生や日本人学生、市民を交えたワークショップにおけるディスカッションを通して、地域の国際交流や文化交流の一機会を提供することができた。
- ⑤ 授業見学や教材紹介を通して、今後の海外協定校の日本語教育指導力の向上に貢献できたのではないかと。
- ⑥ 協定校教員との意見交換や交流を行って、連携強化に貢献できた。
- ⑦ 留学生の受入れ拡大を継続して支援できる事業であることを確認できた。

最後に、今後の展開について考えてみたいと思う。2008年に策定された「留学生 30 万人計画」が開始され 12 年経つが^(注2)、海外からの留学生を増やし、外国人高度人材として日本企業に就職してもらおうとする施策が、現在も文科省を中心に推し進められている。多くの大学が大学の国際化を目指す中で、本学もここ数十年で当初より数倍の数の協定校と提携し、各大学との国際交流を量的に展開してきた。しかし、今後はより質的な展開が必要である。例えば、英語による授業の展開や教育研究の質的交流の推進が求められている。太田(2016)によれば、今後日本語と英語の二元化が求められ、「英語による授業とその課程が増えても、日本語教育の重要性が低くなることはなく、むしろ日本語を初級から学ぼうとする留学生が増え、幅広い層の学習者に対応できるような教育体制の充実が必

要になる」と述べている。高度外国人材が日本に定住し、母国と日本を結ぶ懸け橋的人材となって益々日本社会で活躍してもらうためには、日本語教育による国際交流活動も重要だと思われる。本事業のような日本語教育を軸とした国際交流も大いに推進されるべきである。

今後も、本学における継続的な留学生の増加を目指し、協定校との連携強化を図るために、若手日本語教員を短期間招聘し、日本語教育を軸とした相互交流促進事業を実施し、継続発展させていきたい。

謝辞

本事業にご協力いただいた広西大学の張貴生先生および蔡艶艶先生に心より感謝致します。

注

1. 2020年度は、コロナ禍により三重大学の海外協定校より交換留学生の受入れはなかった。
2. 「留学生 30 万人計画」とは、日本が世界に対してより開かれた国へと発展する「グローバル戦略」の一環として、2020年までに日本国内の外国人留学生を 30 万人に増やすことを目標とした文科省の施策である。2019年に留学生数は 31 万人に達した。

参考文献

- 太田浩（2016）「高等教育の国際化をめぐる動向と課題」『国際教育』日本国際教育学会 22 号、55－82.
- 国際交流センター（2019）「三重大学協定校別交換留学生の受入れ総数（2011 年～2019 年）」平成 31 年度国際交流センター運営会議第 8 回の資料 5

実践報告

米国大学の学生を対象とした英語での三重地域文化発信

— 国際交流センター・教養教育科目「三重学」における Virtual Exchange の取組み —

正 路 真 一

Presenting Mie Regional Culture in English for American University Students: A Virtual Exchange Project in a CIER/CLAS class, “Mie Studies”

SHOJI Shinichi

〈Abstract〉

This article reports a project in a Center for an International Education and Research (CIER) / College of Liberal Arts and Sciences (CLAS) class, “Mie Studies: The Society and Culture of Mie”. In this project, class members conducted poster presentations in English, which introduced the regional culture of Mie prefecture, to students at two different universities in the United States. The post-project questionnaire, given to the students who presented, showed a positive correlation between presenters receiving feedback from the U.S audience-students and an increase in motivation to study English.

キーワード：地域文化、米国、英語、プレゼンテーション

1. はじめに

コロナ禍の深刻化により、大学等教育機関でのオンラインツールの重要性が増している。2020年には世界各国の大学で授業がオンライン化されているが、国際交流の分野においても、インターネットを使った遠隔での授業活動が増すと考えられており、その遠隔活動の形態の一例として Virtual Exchange (VE) や Collaborative Online International Learning (COIL) が挙げられる。VE とは、同期型、非同期型に関わらず、ICT ツールを活用して参加者が共習を行うという緩やかな定義に示されるものであり、活動例としては、複数の拠点間を Zoom 等のウェブ会議ツールで繋ぎ、ディスカッションを行ったりするといったものが含まれる。また COIL は VE よりもやや定義が限定的で、二つ以上の大学でそれぞれ開講されている科目間の連携に基づいて実施される活動を指す。例えば日本の大学と海外の大学の間で、一学期の間で時期的に重複する数週間を使い、アクティブラーニングを促す能動的な協働を課す取り組みなどが COIL に当たる（国際教育研究コンソーシアム 2020）。COIL の活動例としては、静岡県立大学と米国ノースカロライナ大学シャーロット校が 2019 年 10 月から 11

月にかけて実施した共修活動がある。この活動の内容としては、両校の学生がメッセージビデオを作成して、米国大学生は日本語で、日本の大学生は英語を使って自己紹介およびお互いの大学を紹介するといったものなどであった (Yokono & Sawasaki 2020)。

VE および COIL などの意義としては、まず低コストで教育カリキュラムを国際化できるという点、さらに実際に海外に行かずとも学生の意識の国際化を図ることができるという点が挙げられる。例えば、日本人学生が、実際に英語のネイティブスピーカーを相手に英語を話すことで、語学能力の向上のみならず外国および異文化への興味や理解を促進することが期待できる (池田 2016)。こうした利点に鑑みて、関西大学では国際化戦略の教育指針の中で、日本人学生の異文化コミュニケーション能力の涵養を推進することを目的として COIL をカリキュラムに取り入れ、2014 年に COIL 発祥の大学であるニューヨーク州立大学などと初めて COIL 授業を実施し、その後アジア、南米、アフリカ諸国に COIL ネットワークを広げている。さらに関西大学では教職員からなる COIL サポートチームも設立している (関西大学 2020)。

筆者は三重大学の国際交流センター・教養教育解放科目である「三重学：三重の社会と文化」を担当している。この科目は、科目名からも分かる通り三重地域に対する理解と愛着を育むことが目的であることはもちろんであるが、使用言語が英語となっているため、英語能力の向上も授業目的の一つとされている。担当教員である筆者は、本科目において、2020 年前期の 7 月 7 日から 8 月初旬の学期末までの 5 週において VE 活動を取り入れることとした。特にオンラインで進められる授業においては語学学習に必要な発話練習の機会が限られているが、本取り組みはその欠点を補完するものでもある。本稿ではその VE 実践の実践を報告する。

2. 取り組みの実践

2.1 参加学生

本取り組みに参加したのは、「三重学：三重の社会と文化」を受講している 11 名の日本人学生と 2 名の外国人留学生 (共にドイツの三重大学協定校の交換留学生) である。11 名の日本人学生の内訳は、10 名の 1 年生と 1 名の 2 年生であり、また所属学部は 1 名が人文学部、3 名が教育学部、3 名が医学部、4 名が工学部であった。

2.2 目的と内容

VE を用いた本取り組みの内容は、基本的には、前述の静岡県立大学と米国ノースカロライナ大学シャーロット校の COIL プロジェクトをモデルとした。ただし、この両校の

学生がお互いの大学を紹介し合ったのに対し、本取り組みでは「三重学：三重の社会と文化」の科目の目的に鑑みて、三重県についての情報を調査し、米国大学の学生に発表するものとした。具体的には、本科目の受講学生が各自、三重県に関する何らかのテーマ（名所、食べ物、歴史上の人物など）を設定し、5分程度のポスタープレゼンテーションにまとめて発表した。本取り組みの全体的な流れとしては、学生たちのポスター発表を学生自身が各自 Zoom で録画し、筆者がそれらを本取り組み用に作成したブログに掲載し、それを米国大学の学生が視聴した上でブログ上にコメントを投稿するという形をとった。このように自身の発表が米国大学の学生に視聴され、感想を述べられることで、発表学生が海外との繋がりをリアルに感じ、英語学習を含む異文化理解への意欲が促進されることが、本取り組みの目的である。（ただし本科目の受講生 13 名のうち 2 名はドイツ人短期留学生であることは前述の通りであり、これらのドイツ人学生の英語能力は総じて日本人学生よりも高いと推察されることに留意する必要がある。）本稿では上の目的が達成されたかについて、本科目の受講生を対象としたアンケート結果に基づいて報告する。

2.3 実施

2.3.1 準備（7月7日～7月27日）

本取り組みでは、7月7日～27日の約3週間を準備期間とした。まず、7月7日に、2.2節に述べたような本取り組みの概要を説明し、作成したブログの画面を見せ、そして多くの受講学生にとって馴染みがないであろうポスタープレゼンテーションという発表形態について説明した。そして、7月7日から7月13日までの一週間を、各受講学生が発表のテーマを決める期間および調整期間とした。調整期間とは、複数の学生が重複したテーマを選んだ場合にどちらか一方の学生に別テーマを選ばせる期間である。テーマは、「三重県に関わりのあるもの」という緩やかな規定のみを学生に提示し、学生自身にテーマを選ばせた。その結果、計 13 名の受講学生が、伊勢神宮、おかげ横丁、伊賀組紐、伊賀忍者、赤目四十八滝、鳥羽、真珠の養殖、鈴鹿サーキット、鈴鹿青少年の森、四日市工業地帯、長島リゾート、三重県の五つの地域の特色、三重県の神話をテーマとして選んだ。

さらにこの時期に、米国大学の学生をポスタープレゼンテーションの視聴者として確保する必要があったため、筆者の前任校である米国クレムソン大学の学生団体「日本クラブ」に所属している学生と、同じく筆者の前任校である米国ノースカロライナ大学シャーロット校の夏学期の日本語科目を受講している学生に、それぞれの大学の日本語科教員を通して協力を依頼した。（ノースカロライナ大学シャーロット校は、第1章で述べた通り、静岡県立大学と協働して昨年度 COIL プロジェクトを実施した大学である。）ただし、これらの米国

大学の学生の視聴、コメントはあくまでも任意であり、何人の学生が協力してくれるかについて多大な期待はできないことを、仲介役となった当該米国大学の教員から伝えられた。

次の一週間は (7月 14 日～20 日)、パワーポイントを使ったポスター作成期間とした。筆者が過去に実際の学会で使用したいくつかのポスターを例として挙げ、プレゼンテーション用ポスターの作り方を説明した。本科目受講生の多くは一年生であったため、中にはパワーポイントに慣れていない学生もいたので、基本的なパワーポイントのスライドの作り方についての説明動画も作成し、学生に提示した。

次の 1 週間弱 (7月 21 日～26 日) を、プレゼンテーション録画期間とした。ここでは、Zoom を使って自身を録画する方法を説明したワードファイルと説明動画を作成し、学生に提示した。ただし、どうしても Zoom を使って自分を録画することができないという学生に対しては、最低限、携帯電話のボイスメモ機能等を使って自分の発表の音声を録音し、その音声ファイルを筆者に提出することとした。結果、1 名の学生が動画ではなく音声ファイルを提出したので、この学生のプレゼンテーションに関しては、筆者がその音声ファイルを再生しながら Zoom でその学生のポスターを表示して録画した動画ファイルを作成したが、音声の質の劣る動画ファイルとなってしまった。全てのプレゼンテーション動画ファイルは、7月 27 日に筆者によってブログに掲載され、米国大学の学生が視聴する準備を整えた。ブログは一般的な検索ツールでは見つからないよう、URL を知っている者のみ視聴可能と設定した。

2.3.2 発表実施とコメント (7月 28 日～8月 4 日)

ポスター発表の視聴者となる米国大学の学生に対しては、本取り組みを “Mini Virtual Conference: Introduction to Mie” と題し、全てのポスター発表動画が掲載されたブログへのアクセスをメールにて依頼した。具体的なブログ公開時期として、7月 28 日から前期最終日の 8月 4 日までを Mini Virtual Conference 期間とし、この間に米国大学生の視聴とコメントを募った。求めるコメントの内容としては、プレゼンテーションの内容、発表者の英語運用能力、ポスターのデザインなどに関する感想、批評、助言などであることを、事前の周知メールで伝えるとともに、ポスタープレゼンテーション動画を掲載したブログの冒頭に掲載して伝えた。さらに、プレゼンテーションを行った本科目の受講生本人たちにも、最低三つ以上のクラスメートのプレゼンテーションを視聴し、コメントを投稿するよう指示した。

7月 28 日から 8月 4 日までの間に、13 のプレゼンテーションに対して合計 35 件のコメントが米国大学の学生から寄せられた。コメントを投稿した米国大学の学生数は、投稿者

名が明示された投稿から確認できたものが7名であり、この7名から28件のコメントが投稿された。その他匿名の投稿が7件あったが、これらの投稿が何名の学生から寄せられたものかは定かではない。コメントのほぼ全ては発表者に対する好意的な評価であり、また発表者の英語の発話に対する評価や英語文法及び語彙に関する助言も多かった。

3. 事後アンケートとその結果

2020年前期最終日に、本科目を受講した発表者の学生13名を対象に、本科目「三重学：

<u>7月の「米国大学生への三重についてのポスター発表プロジェクト」についてのあなたの評価 Your evaluation on the Poster presentation project toward American University students (in July)</u>	
<p>① このプロジェクトに対するあなたの全体的な評価（一つ選んでください）。Your overall evaluation on this project (Choose one)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・とても良かった Very good ・良かった Good ・どちらとも言えない。Not sure ・あまり良くなかった Not good very much ・全然良くなかった Not good at all <p>→上の答えを選んだ理由は何ですか（自由記述回答）Why did you choose the above answer? (Please describe)</p>	<p>presentation. (Please describe)</p> <p>(この回答は、米国の学生の皆さんに渡します。Your answers for this question will be given to the American University Students.)</p>
<p>② このプロジェクトの課題に対する評価（複数回答可）Your evaluation on the assignments (making a poster and recording your presentation) (Choose as many as you want)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ポスターを作るのが難しかった。It was difficult to make the poster ・ポスターを作るのが時間がかかった。It was time-consuming to make the poster ・動画を録画するのが難しかった。It was difficult to video-record my presentation ・動画を録画するのが時間がかかった。It was time-consuming to video-record my presentation ・難しくもなかったし、時間もかからなかった。Neither difficult nor time-consuming ・その他 Other () 	<p>⑤ このプロジェクトを通して、異文化理解への意欲が増しましたか（一つ選んでください）。Do you think your motivation for understanding different culture increased? (Choose one)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・とても増した。Increased a lot ・少し増した。Increased a little ・変わらない。Not changed ・少し減った。Decreased a little ・とても減った。Decreased a lot <p>→上の答えを選んだ理由は何ですか（自由記述回答）Why did you choose the above answer? (Please describe)</p>
<p>③ あなたのプレゼンテーションについてブログに書かれたコメントについて、どう思いましたか。（自由記述回答）What do you think about the comments for your presentation on blog? (Please describe)</p>	<p>⑥ このプロジェクトを通して、英語学習への意欲が増しましたか（一つ選んでください）。Do you think your motivation for studying English increased? (Choose one)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・とても増した。Increased a lot ・少し増した。Increased a little ・変わらない。Not changed ・少し減った。Decreased a little ・とても減った。Decreased a lot <p>→上の答えを選んだ理由は何ですか（自由記述回答）Why did you choose the above answer? (Please describe)</p>
<p>④ あなたのプレゼンテーションにコメントを書いてくれた米国の学生の皆さんにメッセージを書いてください。（自由記述回答）Please write a message to the American university students who gave comments on your</p>	<p>⑦ 皆さんの PowerPoint やプレゼンテーション動画を、来学期のこのクラスで、サンプルとして見せたいと思います。サンプルとして授業で使われたくない人は、そう書いてください。Shoji-sensei wants to use your PowerPoints, presentation movies, etc. as samples in the next semester. If you want him not to use your work, please write so.</p>

図1 アンケート質問①～⑦

三重の社会と文化」に対する評価及び意見を聴取するためのアンケートを実施した。このアンケートの中の一つのセクションとして、本稿に報告する VE を活用した取り組みに対する質問を含めた。その質問を図 1 に示す。

図 1 にある質問のうち、本稿では、本取り組みに対する全体的な評価 (質問①) についての学生の回答を 3.1 節で、米国の大学の学生のコメントに対する感想 (質問③) を 3.2 節で、異文化理解に対する意欲の増減 (質問⑤) を 3.3 節で、英語学習に対する意欲の増減 (質問⑥) を 3.4 節において報告する。

3.1 本取り組みに対する全体的な評価 (質問①)

質問①「このプロジェクトに対するあなたの全体的な評価」に対する回答 (選択式) と、その回答を選んだ理由 (自由記述式) を表 1 に示す。また、表 1 右列の自由記述回答については、各回答に回答者を記号で付記する。日本人学生 11 名については JS 1~JS 11、ドイツ人学生 2 名については GS 1~GS 2 と記す (JS は Japanese student を、GS は German student を表す。) この記号は、本稿の全ての表 (表 1~4) に共通であり、例えば、表 1 で JS 1 として示される学生と表 2 で JS 1 として示される学生は同一人物である。なお、自由記述回答については、回答の言語を英語とも日本語とも指示しなかったため、英語で回答した学生と日本語で回答した学生がいた。

表 1 質問①「このプロジェクトに対するあなたの全体的な評価」に対する回答

回答選択肢	回答数と割合	左の回答を選んだ理由 (原文ママ)
とても良かった	4 (30.8%)	<ul style="list-style-type: none"> ● (JS 5) I have experienced a lot of things I have never done before. ● (JS 9) I have never had the opportunity to get a advice from native speaker living in America. So, this was a very valuable experience. ● (JS 7) This project was the opportunity to gain the knowledge of power point. I can speak English a lot. It was very fun. ● (JS 2) Because I was glad that other people appreciated the slides I made from the beginning and the presentation I practiced.
良かった	7 (53.8%)	<ul style="list-style-type: none"> ● (JS 1) ポスタープレゼンテーションなど、新しいことができて勉強になったから。 ● (JS 3) 高校の時にはできなかった類のものをすることが出来たから。 ● (JS 8) 自分自身で三重を調べる機会になったのもいいと思ったし、それを英語で書くということで英語力の向上にもなったから。また自分の英語のプレゼンテーションを外国の方に見てもらう機会なんてめったにないのでごく貴重な体験になったと思う。 ● (JS 11) 他人に発表したい内容を伝えるためにそれ以上の内容を知ることができたから。

		<ul style="list-style-type: none"> ● (JS 4) It became an opportunity to know Mie prefecture, learning in English. How to make the presentation poster depends on you, so I could watch variety of the poster. ● (GS 2) Of course because of corona we couldn't meet in person and so any presentation as we used to, but I received a really helpful comment on my poster presentation from a American student and I liked the fact that we are able to receive that through the blog. ● (JS 6) 記述なし
どちらとも言えない	0	NA
あまり良くなかった	1 (7.7%)	● (GS 1) I just don't like being recorded giving presentations and it being uploaded on the internet.
全然良くなかった	1 (7.7%)	● (JS 10) 英語がたどたどしく、また、ポスターの内容が少なすぎて、プレゼンテーションの尺が指定の時間に届かなかったなど。

表1の通り、「とても良かった」と「良かった」という選択肢に回答の多くが集中していることから、本取り組みに対する学生の評価は概ね高いと推察される。これらの回答が選ばれた理由としては、6名が、これまでしたことのない新しい経験ができたということに言及している。具体的には、英語のネイティブスピーカーに発表を見せてコメントを得られたこと、パワーポイントの使い方を学べたこと、ポスタープレゼンテーションをしたことなどである。逆に「あまり良くなかった」と回答された理由はインターネット上で自身のプレゼンテーションを公開したくないという学生の気持ちであり、また「全然良くなかった」と回答された理由は自身のプレゼンテーションの出来具合に関するものであった。これら二つの回答は、取り組みの内容自体に関わるものではない。

また、表1に示されるように、(日本語よりも英語の方が能力が高いと思われるドイツ人学生を除き)本取り組みに高評価を与えている学生ほど、英語で自由記述回答を記述している者が多いようである。これには、これらの学生が英語を使うことに抵抗がなくなったあるいは意欲的になったという解釈が可能であるが、もともと英語能力が高い学生であったという可能性、あるいは偶然の結果という可能性なども考えられる。

3.2 米国大学の学生からのコメントに対する感想(質問③)

質問③「あなたのプレゼンテーションについてブログに書かれたコメントについて、どう思いましたか」に対する回答(自由記述)を表2に示す。この質問に対する回答から、発表者である三重大学の学生たちが米国大学の学生の反応からどのような教育効果を得られたかについて推察する。なお、この質問は自由記述回答式であったが、回答を筆者がい

くつかの種類に分類して表の左列に示す。

表 2 質問③「あなたのプレゼンテーションについてブログに書かれたコメントについて、どう思いましたか」に対する回答

回答の種類	回答数と割合	回答 (原文ママ)
自身の発表にコメントをもらえたことへの感謝	5 (38.5%)	<ul style="list-style-type: none"> ● (JS 5) I thought it was a valid opinion. ● (JS 7) I was very happy because of those comments. ● (JS 9) In high school, I don't have many chances to learn about speaking English. So, I'm glad to get a advice about speaking ability. ● (GS 1) I'm thankful for the feedback. ● (GS 2) As I said before I received a really helpful one from an American student.
自身の発表の間違いの指摘に対する言及	2 (15.4%)	<ul style="list-style-type: none"> ● (JS 4) Some people said that my presentation was not bad, but my poster is kind of dark. I think It is not easy to read, too. ● (JS 6) I think that pronunciation is so difficult.
自身の発表に対する高評価への感謝と喜び	4 (30.8%)	<ul style="list-style-type: none"> ● (JS 2) I was honestly happy because everyone praised me for my hard work. ● (JS 8) 少々ミスはあったがほとんどの人が“clear”だと発表をほめてくださったり、三重県について知れたと言ってくさったので嬉しかった。特に英語の発音に自信がなかったので、発表自体を褒めてもらったことで自信にも繋がった。 ● (JS 10) 暖かい言葉がありがたかった。 ● (JS 11) 素直に嬉しかった。頑張ってやり遂げてよかったと思えた。
自身の発表の間違いの指摘に対する感謝	2 (15.4%)	<ul style="list-style-type: none"> ● (JS 1) 文法や単語の間違い、改善点を指摘していただいたのがよかった。invent と invite のことに関しては、「誘致された」の意味で使ったのだが、意味的に違ったのだろうという点で勉強になった。 ● (JS 3) 感想ばかりでなくて、改善点なども書いてくださったので良かった。

表 2 の通り、最も多くの回答を集めたのは、「自身の発表にコメントをもらえたことへの感謝」であった。また「自身の発表の間違いの指摘に対する言及」も 2 名から寄せられた。これらの回答からは、米国の大学の学生のコメントから具体的にどのような教育効果を得られたのかは読み取れない。一方、「自身の発表への高評価に対する感謝と喜び」を示す回答も 4 名と比較的多く、これらの回答からは、本取り組みが学生の英語能力およびプレゼンテーション能力への自己肯定感や自信の獲得につながったという可能性が示唆される。さらに「自身の発表の間違いの指摘に対する感謝」を表す 2 名の回答の中には、特定の英単語の使い方に関する言及があり、語学学習上の具体的な学習効果が示唆されている。

また、表2に示されるように、具体的な教育効果が読み取れない類の回答（「自身の発表にコメントをもらえたことへの感謝」と「自身の発表の間違いの指摘に対する言及」）が全て英語での回答であったのに対し、具体的な教育効果が読み取れる回答（「自身の発表への高評価に対する感謝と喜び」と「自身の発表の間違いの指摘に対する感謝」）はほとんどが日本語での回答であった。これには、回答を英文で書く能力に欠ける（比較的英語能力が低い）学生の方が、米国の学生のコメントから目に見える影響（自信の獲得など）を受けたという解釈が可能であるが、あるいは単に偶然の結果という可能性もある。

3.3 異文化理解への意欲の増減（質問⑤）

質問⑤「このプロジェクトを通して、異文化理解への意欲が増しましたか」についてであるが、この質問の曖昧さについて筆者の説明と反省が必要である。本取り組みは三重県のことについて調べて発表するものであるため、発表者の出身地によって、その発表の内容が異文化であったり異文化でなかったりする。ドイツ人留学生にとっては発表の内容が異文化であるため、質問⑤の趣旨が「三重県のことを発表することで三重県（＝異文化）に対する意欲が増したか」と解釈されたであろうし、逆に三重県出身の日本人学生にとっては発表内容である三重県は異文化ではないため、質問⑤の趣旨が「米国の学生との交流を通じて外国文化（＝異文化）に対する意欲が増したか」と解釈されたであろう。また三重県外出身の日本人学生にとっては、上の両方の意味で解釈された可能性がある。筆者自身も意図が曖昧なまま設問してしまったというのが実際のところで、今となっては、「異文化理解」と問うのではなく、本科目の内容に鑑みて、「他の学生の三重県に関するプレゼンテーションを見て、三重県に対する意欲が増しましたか」とすべきであったと考えている。そして本取り組みの目的を、第一に「外国語学習への意欲の喚起」、第二に「三重地域文化理解への意欲の喚起」とし、上の設問を第二の目的の達成度を調べるものとすべきであった。

上に述べた問題点に留意する必要があるが、質問に対する回答（選択式）と、その回答を選んだ理由（自由記述式）を表3に示す。

表3 質問⑤「このプロジェクトを通して、異文化理解への意欲が増しましたか」に対する回答

回答選択肢	回答数と割合	左の回答を選んだ理由（原文ママ）
とても増した	5 (38.5%)	<ul style="list-style-type: none"> ● (JS 1) 三重について調べ、発表することで、逆に別の国の人たちは自分の国についてどんな発表をするのだろうと興味を持ったから。 ● (JS 10) 別にまるっきりこちらの意図を伝えられないわけではないと感じたから。

		<ul style="list-style-type: none"> ● (JS 5) I have more opportunities to come into contact with English. ● (JS 2) I was able to get various perspectives. ● (JS 7) 記述なし
少し増した	6 (49.1%)	<ul style="list-style-type: none"> ● (JS 3) いろいろな人の経験を知ることができたから。 ● (JS 8) 自分の住んでいる地域のことを調べることで他の地域ではどうかなと外へ目を向けるいい機会になったと思うから。 ● (JS 4) We could communicate with foreigners. It is exciting. ● (JS 9) I made a poster with English. It was hard. But because of using many English words, I became more interested in English and different cultures. ● (GS 2) Because from the beginning I am studying Japanese culture I had a lot of interest, but through this class my interest for little and sometimes not that famous and spectacular places increased. <p>-----</p> <ul style="list-style-type: none"> ● (JS 6) 記述なし
変わらない	2 (15.4%)	<ul style="list-style-type: none"> ● (JS 11) 三重県のことしかテーマにしていないから。 ● (GS 1) I'm always interested in other cultures.
少し減った	0	NA
とても減った	0	NA

表 3 に示されるように、「(異文化理解への意欲が) とても増した」あるいは「少し増した」とする回答が多く、本取り組みの効果をある程度肯定する結果となった。異文化理解への意欲とは、具体的には、三重 (= 自身の文化) について調べることで他の地域 (= 異文化) についても興味を持ったという内容のもの、また米国大学の学生への発表を通して英語 (= 異文化) の学習に意欲を持ったという内容のものが見られる。ただし、「(異文化理解への意欲は) 変わらない」とする回答の一つは、その理由を「三重県のことしかテーマにしていないから」としており、おそらくはこの学生が三重県出身であるため、「異文化」について問う質問の対象に該当しないと考えた可能性が高い。これには、前述の通り筆者の設問の曖昧さによる影響が反映されていると考えられる。

3.4 英語学習への意欲の増減 (質問⑥)

質問⑥「このプロジェクトを通して、英語学習への意欲が増しましたか」に対する回答 (選択式) と、その回答を選んだ理由 (自由記述式) を表 4 に示す。また、この質問に対して無回答であった学生が 1 人いたことを、表の最下段に付記する。

表 4 質問⑥「このプロジェクトを通して、英語学習への意欲が増しましたか」に対する回答

回答選択肢	回答数と割合	左の回答を選んだ理由（原文ママ）
とても増した	7 (53.8%)	<ul style="list-style-type: none"> ● (JS 5) I have more opportunities to come into contact with English. ● (JS 7) I had the opportunity to speak English. ● (JS 2) I read the comments of everyone's impressions and felt that I wanted to have more conversation in English. ● (JS 9) This class was very fun. So I became more interested in studying English. ● (JS 8) 英語で伝えなければいけなかったの、先生に添削していただけたとは言えども、やらなければという責任感みたいなものを感じたから。 ● (JS 3) 英語が出てこなかったり、時間がかかったりしてもどかしかったから。 ● (JS 10) 異文化理解に関してと同様。(=質問⑤の回答「別にまるっきりこちらの意図を伝えれないわけではないと感じたから。」)
少し増した	3 (23.1%)	<ul style="list-style-type: none"> ● (JS 4) I understood I can interact with people all over the world by using English. ● (JS 1) 他の人に正確に自分の考えを伝えるために、語彙や文法を正しく使っていかなければならなかったから。 ● (JS 11) 下手なりに英語をうまく話そうとしてみることができたから。
変わらない	2 (15.4%)	<ul style="list-style-type: none"> ● (GS 1) There's not so much to learn anymore for me since my minor is English at my home university. ● (GS 2) From a young age on I try to include English in my everyday life, like reading in English or watching in English, but I was really happy to use it in class and speak a little, because for me there are not many chances to speak in English.
少し減った	0	NA
とても減った	0	NA
無回答	1 (7.7%)	● (JS 6)

まず、予期されたことであったが、英語能力が高いと思われるドイツ人留学生2名は、英語学習に対する意欲に変化はないと回答した。ヨーロッパ系の留学生に対しては、本取り組みは英語学習意欲を喚起するための活動としては難易度が低すぎたと推察される。日本人学生11名については、うち7名が「(英語学習に対する意欲が)とても増した」と回答しており、本稿で取り上げたアンケート結果の中で最も確からしい教育効果が示された。英語学習の意欲が増した理由としては、英語で米国大学生とコミュニケーションをとる機会が得られたからというものが多く、また「別にまるっきりこちらの意図を伝えれないわ

けではないと感じたから」といったような自信の獲得を示すもの、また逆に「英語が出てこなかったり、時間がかかったりしてもどかしかったから」といったような自身の能力不足を感じたものまで、様々であった。

4. 考察

まず、本取り組みに対する全体的な評価を聞いた質問①の結果から、この取り組みが学生たちにとって、これまでしたことのない新しい経験を与えられたと評価できる。その新しい経験の内容とは、(前述の通り) 英語のネイティブスピーカーに発表を見せてコメントを得られたこと、パワーポイントの使い方を学べたこと、ポスタープレゼンテーションについて学べたことなどであるが、特に第一の点が VE を活用した意義だと考えられる。第 1 章で述べた通り、日本の大学に在学する日本人学生にとって、実際に海外に行くことなく海外の大学の学生と交流できることは、経済的な負担がないことを含め、大きなメリットであると思われる。特に外国語の学習に重きを置く学生にとって、学習言語の母語話者とやりとりすること、また母語話者による自身の外国語運用に対する評価やコメントを得ることは重要な体験であろう。英語学習の意欲への影響についての質問⑥及び米国大学の学生から寄せられたコメントに対する感想を聴取した質問③の結果からも、米国大学の学生に対して英語を使うこと、英語が通じることの喜び、自信の獲得、また自身の課題の認識などが感想として得られた。こうした効果は、学習対象言語を母語とする話者によって提供されるものからこそ説得力を持って学生に与えられるものである可能性が高い。それは例えばアカデミックな能力や経験に乏しい者(例えば普通のアメリカ人の大学 1 年生)によるフィードバックであったとしても、である。その理由は学習言語を母語として自然に操ることができる者との直接的なやり取りから得られるものであるからに他ならない。こうした効果を得ることが VE の強みであり、本取り組みにおいてもその効果が得られたことが確認されたと考える。

その他、本取り組みによって得られた効果として質問①に挙げられたパワーポイントの使い方を学べたという評価については、全 13 名の受講生のうち 11 名を占めた 1 年生にとって特に有益な経験であったと考えられ、さらに、ポスタープレゼンテーションについて学べたという評価からは、ポスターという形態を使ったプレゼンテーションは比較的他科目では実施されることの少ないものであることが反映されていると推察される。

5. おわりに

本稿は、VE を用いた三重大学の学生と米国大学の学生の交流活動を報告した。本取り

組みが、VE を活用して教育カリキュラムの国際化を試み、受講学生の語学学習および異文化理解への意欲の喚起を目的としたものであることは、2.2 節で述べた通りである。事後アンケートの結果、三重大学の学生（特に日本人学生）にとって、とりわけ英語学習への意欲を高める効果が示唆された。しかしながら、本取り組みの反省として、いくつかの点が挙げられる。第一に、情報の発信が一方通行であったことである。本取り組みは三重大学の学生が三重県についてプレゼンテーションをするという内容であり、米国の学生が米国についての何かを紹介するという行程はなかった。英語学習の観点から見ると、スピーキングの演習にはなったものの、リスニングの演習に相当するものはなかった。これに対応するには、米国大学の学生から三重大学の学生への発信を組み込む必要があるが、これは米国大学の学生にも一定の負担を課すものであるため、先方にも何らかのメリットを与えるものを考案する必要があると考えられる。例えば前述のノースカロライナ大学シャーロット校と静岡県立大学の COIL プロジェクトのように、日本語を学習する米国大学の学生にとって日本語演習の場となるようなものも作る必要がある。労力と時間的な制約を含め、今後の検討課題である。

第二の反省点として、本取り組みに参加した2名のドイツ人留学生にとって、英語の演習という活動があまり意味のないものであったことである。この2名のドイツ人の英語能力は概ね日本人の受講学生よりも高く、また日本に留学に来ているドイツ人にとって英語は重要な学習対象ではない。従って、本科目の学習内容が三重地域文化の学習と英語の学習であるとは言え、英語学習の比重が前者を上回るべきではないと考えられる。このバランスをどのように取るかも、担当教員にとっての課題である。

参考文献

- 池田佳子 (2016) 「「バーチャル型国際教育」は有効かー日本で COIL (Collaborative Online International Learning) を遂行した場合」『国際交流』 vol.67, 1-11.
- 関西大学 Institute for Innovative Global Education (2020) 「KU-COIL」 (<http://www.kansai-u.ac.jp/Kokusai/IIGE/jp/resources/KU-COIL.php>)
- 国際教育研究コンソーシアム (2020) 「第3回国際教育のスピリットを取り込もう！ Virtual Exchange (COIL) を超短期間でも取り込む手法ワークショップ<報告> 池田教授による日本語版解説」 (<http://recsie.or.jp/wp-content/uploads/2020/05/8602954c088550321db1ae29de894d4f.pdf>)
- Yokono, Yukiko & Sawasaki, Koichi. (2020). Cultural exchanges via flipgrid and ML (mailing list): How to effectively interact beyond textbooks and time zones. Paper presentation at Southeastern Association of Teachers of Japanese, February 2020, University of Memphis, TN.

外国人留学生による三重地域文化発信

— 国際交流センター科目「日本事情 I」における Virtual Exchange の取組み —

正 路 真 一

Presenting Mie Regional Culture to Students in Another Prefecture: A Virtual Exchange Project in a CIER class, “Japanese Culture I”

SHOJI Shinichi

〈Abstract〉

This article reports a Virtual Exchange (VE) project in a Center for International Education and Research (CIER) class, “The Society and Culture of Mie”, which was offered to international students at Mie University. In this project, the international students conducted poster presentations in Japanese, which introduced the regional culture of the prefecture of Mie to students attending the University of Shizuoka. The objectives of the project were to encourage the international students to (i) study the Japanese language and (ii) to become (unofficial) ambassadors that build bridges between the prefecture of Mie and their home countries. The post-project questionnaire, given to students who presented, indicated that the project elicited moderate effects of the above (i) and (ii) objectives.

キーワード：地域文化、日本語、プレゼンテーション

1. はじめに

2020 年前半のコロナ禍以降、三重大学を含む世界各地の教育機関では、Zoom 等のツールを用いたオンライン授業が急速に普及した。こうした遠隔型の教育活動の手法として Virtual Exchange (VE) が注目されており、特に語学学習や国際交流活動の分野ではコロナウィルスの発生以前からその有用性が認められていた (池田 2016; Hagley 2016; Hagley & Harashima 2017)。VE とは、オンラインツールを用いて学生が遠隔地の学生 (例えば海外の学生など) との交流などを通じ、異文化コミュニケーション能力を高めることに効果を発揮するものであり、しかもコストを低く抑えられることが利点として挙げられる (池田 2016)。日本の大学で行われた VE 活動の事例としては、例えば Hagley (2016) が、室蘭工業大学の学生と他の国内大学およびコロンビアやベトナムの学生との英語のみによるオンライン語学学習活動を報告している。

筆者は三重大学の国際交流センター科目として「日本事情Ⅰ：三重の社会と文化」を担当している。この科目は外国人留学生を対象とした科目であり、日本語能力の向上はもとより三重県について学ぶことを目的とした地域文化学習科目でもある。本科目は 2020 年前期においてはすべてオンラインで実施されたが、筆者は 7 月 7 日から 8 月初旬の学期末までの 5 週において VE を活用し、国内の他大学の学生（そのほとんどは日本人学生）との交流活動を取り入れた。特にオンラインで進められる授業においては語学学習に必要な発話練習の機会が限られているが、本取り組みはその欠点を補完するものでもある。本稿ではその VE 活動の実践を報告する。

2. 取り組みの実践

2.1 参加学生

本取り組みに参加したのは、「日本事情Ⅰ：三重の社会と文化」を受講している 10 名の外国人留学生である。10 名の外国人留学生の内訳は、3 名のタイ人、3 名のドイツ人、3 名の中国人、1 名のカンボジア人であった。彼、彼女らは 1 名の大学院短期特別研究学生（中国人）を除き、全て三重大学の協定校からの交換留学生であり、これらの交換留学生は皆、日本語または日本学を専攻とする学生であった。（うち二人は、日本語とともに韓国語と英語も専攻とする学生であった。）これらの学生達の日本語能力は、彼、彼女らがこれまでに合格した日本語能力試験（JLPT）の結果および三重大学の日本語レベル判定試験の結果から、日本語能力試験の N1～N3 程度のレベルにあると推察される。

2.2 活動の目的と内容

本 VE 活動の内容は、「日本事情Ⅰ：三重の社会と文化」の科目の目的に鑑みて、三重県に関する何らかのテーマ（名所、産物、三重県出身の人物など）について 5 分程度のポスタープレゼンテーションの形を取り、三重県外の他大学の学生に対して発表するものとした。この取り組みの目的は、第一に VE を通して見ず知らずの日本人学生に対して日本語で発表を行い、そしてフィードバックを得ることで、留学生（発表者）の日本語学習意欲を高めることである。さらに第二の目的は、三重県についての調査と発表を行った留学生（発表者）が三重県についての理解を深め、三重県と母国を結ぶ広報大使のような存在となるということである。本稿は、上記の二つの目的が果たされたかについて、受講学生を対象とした事後アンケートの結果を基に報告する。さらに本取り組みは、長期的にはインバウンドの拡大にも繋がる可能性がある。外国人留学生が三重県について調査しそれを他県の学生に発表することで、視聴者である他県の大学生および発表者である留学生の母

国での友人等の三重県への旅行意欲が刺激され、これが三重県の観光業等の活性化に繋がるといえる可能性である。

ポスタープレゼンテーションで三重県を紹介するに当たっては、その発表の視聴者として、静岡県立大学の教員とその教員が担当する科目「日本語表現法ⅠA」の受講学生に協力を仰いだ。静岡県立大学は2019年10～11月に米国ノースカロライナ大学と協働してCOILプロジェクトを実施した大学である。COILとは Collaborative International Learning の略語で、VEの下位範疇にあたるものであるが、本稿で報告するVE活動については、上のCOILプロジェクトを担当した静岡県立大学国際関係学部の教員に協力を依頼した。

おおまかな活動手順としては、まず、三重大学の外国人留学生が、自身がポスター発表をしている様子をZoom等を使って自分で録画し、その動画ファイルを全て、筆者がインターネット上で作成したブログに掲載した。これを受けて静岡県立大学の学生は、ブログ上で三重大学の外国人留学生のポスター発表動画を視聴し、その発表に対しての感想等のコメントを同ブログの画面上に投稿することとした。45名の静岡県立大学生に対して三重大学の留学生10名が合計10のポスタープレゼンテーションを準備したが、45名がどのプレゼンテーションを視聴するかは、静岡県立大学の教員によって均等に振り分けられた。また、三重大学の留学生のプレゼンテーションが掲載されたブログは、本取り組み用に筆者が作成したものであり、一般的な検索ツールでは見つからないよう、URLを知っている者のみ視聴可能と設定した。次節に、上記の活動の詳細を報告する。

2.3 実施

2.3.1 準備（7月7日～7月27日）

本取り組みでは、7月7日～27日の約3週間を準備期間とした。まず、7月7日の授業において、筆者が作成した発表動画掲載用ブログの画面を見せながら、2.2節に述べたような本取り組みの概要を説明し、さらに幾人かの受講生にとって馴染みがないであろう「ポスター発表」という発表形態について説明した。そして、7月7日から7月13日までの一週間を、各受講学生が発表のテーマを決める期間とした。テーマは、三重県に関わりのあるもの（名所、産物、三重県出身の人物など）ならなんでも可とした。テーマを決める期限は7月9日としたが、複数の学生が選んだテーマが重複した場合、7月9日から13日の間に、どちらか一方の学生に別テーマを選ばせるよう調整した。その結果、伊勢うどん、松尾芭蕉、石神神社、ナガシマスパーランド、真珠、伊勢えび祭り、鳥羽水族館、横山展望台、三重県の産業、夫婦岩がテーマとして選ばれた。

先のテーマの決定について少し説明を加える。7月の本取り組みに先立ち、本科目では5月の課題として各学生にパワーポイントスライド（ポスターではない通常の発表用のパワーポイントスライド）を作成させていた。スライドの内容は、7月の本取り組みと同様、三重県に関わる何かについて調べ、それをパワーポイントにまとめるというものであった。7月の本取り組みのテーマは、5月のスライドと同じテーマでも別のテーマでも良いとしたが、別のテーマを選んだ学生には、学期末の成績に加点するとした。その結果、全10名の受講学生中、6名が5月と同じテーマを選び（真珠、伊勢えび祭り、鳥羽水族館、横山展望台、三重県の産業、夫婦岩）、他の4名が5月とは異なるテーマを選んだ（伊勢うどん、松尾芭蕉、石神神社、ナガシマスパーランド）。

テーマの決定に続き、7月14日から20日までの週を使って、パワーポイントを用いた発表用ポスターの作成を課した。筆者が過去に実際の学会で発表したポスターを例として提示し、プレゼンテーション用ポスターの作り方を説明した。それを受けて学生はポスターを作成し、筆者に提出した。提出されたポスターは筆者が確認し、日本語文等の修正を行った（または修正を指示した）後、各学生に返却した。（ただし、筆者が修正したポスターを用いず、日本語文が間違っただまのポスターを使ってプレゼンテーションをした学生が1名いたことを付記する。）

ポスターの作成が終了した後、7月21日から26日までの間に、学生各自に自身のプレゼンテーション動画を作成させた。この発表動画作成に当たっては、Zoomを使って自身を録画する方法を説明したワードファイルと説明動画を学生に提示した。ただし、どうしてもZoomを使って自分を録画することができないという学生に対しては、最低限、携帯電話等を使って自分の発表の音声を録音し、その音声ファイルを筆者に提出しても可とした。結果、2名の学生が動画ではなく音声ファイルを提出したので、この学生らのプレゼンテーションに関しては、筆者がZoomでその学生のポスター表示しながら音声ファイルを再生し、動画ファイルを作成した。結果として、この2名の学生の動画ファイルは音声の質の劣るものとなってしまった。最終的に、全てのプレゼンテーション動画ファイルは、7月27日に筆者によってブログに掲載され、静岡県立大学の学生の視聴を待った。

2.3.2 発表とコメント（7月28日～8月4日）

7月28日から前期最終日の8月4日正午までの間に静岡県立大学の学生の視聴とコメントを募った。求めるコメントの内容としては、プレゼンテーションそのもの、または発表者の日本語能力に関する感想、評価、助言などであったが、これは静岡県立大学の学生に事前の案内メールで説明するとともに、ポスタープレゼンテーション動画を掲載したブ

ログの冒頭に記した。7月28日から8月4日までの間に、45名の静岡県立大学の学生全員から一人一つずつコメントが投稿された。コメントの全ては発表の内容及び発表者の日本語能力に対する評価であり、そのほとんどは好意的なものであったが、改善点を指摘するコメントも17件あった。具体的な改善点としては、日本語の発音や言葉の誤用を指摘するものから、ポスター上の字の量、字の大きさ、写真の量、その他のデザインに関する改善案まで様々であった。また、「発表を聞いて三重県に行きたくなった」という感想も23件あった。

3. 事後アンケート

本取り組みを実施した2020年前期最終日に、本科目「日本事情Ⅰ：三重の社会と文化」を受講した学生10名を対象に、本科目に対する全体的な評価を聴取するためのアンケートを実施したが、このアンケートの中の一つのセクションとして、本稿に報告するVE活動に対する質問を含めた。それらの質問を図1に示す。

図1にある質問のうち、本稿では、本取り組みに対する全体的な評価（質問①）、静岡県立大学の学生のコメントに対する感想（質問③）、三重県への理解度の増減（質問⑤）、三重県に対する愛着の増減（質問⑥）、三重県のお勧めの旅行先（質問⑦）、日本語学習に対する意欲の増減（質問⑧）についての学生の回答を報告する。質問①は本取り組みについての全般的な評価を調査し、3.1節で報告する。質問③、⑧はVEによる日本語学習についての効果を調査するものであり、3.2節で報告する。そして質問⑤、⑥、⑦については発表者である留学生が、三重県と母国を結ぶ広報大使となるための素養を得られたかについて調べたものであり、3.3節で報告する。なお、本取り組みに参加した受講学生10名のうち1名（タイ人）はアンケートを提出しなかったため、回答者数は9名であった。また、自由記述回答については、回答の言語を英語とも日本語とも指示しなかったため、英語で回答した学生が1名（ドイツ人）いたが、その他の学生は全て日本語で回答した。

3.1 本取り組みについての全体的な評価（質問①）

本節では、このポスター発表プロジェクトへの全体的な評価として、アンケートの質問①「このプロジェクトに対するあなたの全体的な評価」の結果を報告する。質問①の結果を表1にまとめるが、回答選択肢を左列に、回答数（とその割合）を中列に、その選択肢を選んだ理由（自由記述回答）を右列に示す。自由記述回答の表示については、各回答を原文のまま載せ、その回答者を記号で付記する。タイ人学生2名についてはTS1～TS2、ドイツ人学生3名についてはGS1～GS3、中国人学生3名についてはChS1～ChS3、カ

7月の「静岡県立大学生への三重についてのポスター発表プロジェクト」についてのあなたの評価 Your evaluation on the Poster presentation project toward the students of the University of Shizuoka (in July)

① このプロジェクトに対するあなたの全体的な評価 (一つ選んでください)。Your overall evaluation on this project (Choose one)

- ・とても良かった Very good
- ・良かった Good
- ・どちらとも言えない。Not sure
- ・あまり良くなかった Not good very much
- ・全然良くなかった Not good at all

→上の答えを選んだ理由はなんですか (自由記述回答) Why did you choose the above answer? (Please describe)

② このプロジェクトの課題に対する評価 (複数回答可) Your evaluation on the assignments (making a poster and recording your presentation) (Choose as many as you want)

- ・ポスターを作るのが難しかった It was difficult to make the poster
- ・ポスターを作るのが時間がかかった It was time-consuming to make the poster
- ・動画を録画するのが難しかった It was difficult to video-record my presentation
- ・動画を録画するのが時間がかかった It was time-consuming to video-record my presentation
- ・難しくもなかったし、時間もかからなかった Neither difficult nor time-consuming
- ・その他 Other ()

③ あなたのプレゼンテーションについてブログに書かれたコメントについて、どう思いましたか。(自由記述回答) What do you think about the comments for your presentation on blog? (Please describe)

④ あなたのプレゼンテーションにコメントを書してくれた静岡県立大学の学生の皆さんにメッセージを書いてください。(自由記述回答) Please write a message to the University of Shizuoka students who gave comments on your presentation. (Please describe)

(この回答は、静岡県立大学の学生の皆さんに渡します。Your answers for this question will be given to the University of Shizuoka students.)

⑤ このプロジェクトを通して、三重県への理解度が増しましたか。(一つ選んでください) Through this project, did your understanding of Mie increase? (Choose one)

- ・とても増した Increased a lot
- ・少し増した Increased a little
- ・変わらない Not changed
- ・少し減った Decreased a little
- ・とても減った Decreased a lot

→上の答えを選んだ理由はなんですか (自由記述回答) Why did you choose the above answer? (Please describe)

⑥ このプロジェクトを通して、三重県への愛着が増しましたか。(一つ選んでください) Through this project, did your love/attached feeling toward Mie increase? (Choose one)

- ・とても増した Increased a lot
- ・少し増した Increased a little
- ・変わらない Not changed
- ・少し減った Decreased a little
- ・とても減った Decreased a lot

→上の答えを選んだ理由はなんですか (自由記述回答) Why did you choose the above answer? (Please describe)

⑦ もし自分の国の人々が三重県に旅行するならば、どこに行くことをおすすめしますか。(自由記述回答) Where in Mie do you recommend to people from your country if they travel in Mie? (Please describe)

⑧ このプロジェクトを通して、日本語学習への意欲が増しましたか。(一つ選んでください) Through this project, did your motivation on studying Japanese increase? (Choose one)

- ・とても増した Increased a lot
- ・少し増した Increased a little
- ・変わらない Not changed
- ・少し減った Decreased a little
- ・とても減った Decreased a lot

→上の答えを選んだ理由はなんですか (自由記述回答) Why did you choose the above answer? (Please describe)

⑨ 皆さんの PowerPoint やプレゼンテーション動画を、来学期のこのクラスで、サンプルとして見せたいと思います。サンプルとして授業で使われたくない人は、そう書いてください。Shoji*sensei wants to use your PowerPoints, presentation movies, etc. as samples in the next semester. If you want him not to use your work, please write so.

図 1 本 VE 活動に関する質問①～⑨

ンボジア人学生 1 名については CaS 1 と記す。(TS は Thai student を、GS は German student を、ChS は Chinese student を、CaS は Cambodian Student を表す。) この学生を表す記号は、本稿の全ての表 (表 1～6) に共通であり、例えば、表 1 で TS 1 として示される学生と表 2 で TS 1 として示される学生は同一人物である。

表1 質問①「このプロジェクトに対するあなたの全体的な評価」に対する回答

回答選択肢	回答数と割合	左の回答を選んだ理由（原文ママ）
とても良かった	1 (11.1%)	● (ChS 3) 良いところ、悪いところ、全部書けると素敵だと思います。
良かった	7 (77.8%)	<ul style="list-style-type: none"> ● (TS 1) たくさん資料を読んだし、いろいろなニュースを読みました。もっとくわしいないようがわかりました。 ● (TS 2) ポスターと発表するのが文章を読みながら、発音練習もできるからです。 ● (GS 1) Zoom と Powerpoint の使い方を勉強になり、プロジェクトはいい経験だと思います。 ● (GS 2) It was fun creating the poster, but it would have been even better if we could have presented them in some form of gallery or something. But sadly that wasn't possible because of corona. ● (GS 3) 日本語でプレゼンテーションを作って、発表するという練習が楽しくて、とくに日本人からのフィードバックはよかったです。 ● (ChS 1) みんなは自分で作ったポストを分かりやすく説明してとてもいいと思います。ただし、発音、説明の技など色々な問題があって、さらに進歩する可能性があります。 ● (ChS 2) 自分の発表を見てもらってコメントをもらえるのがとても楽しかったです。
どちらとも言えない	1 (11.1%)	● (CaS 1) 意見がありません。
あまり良くなかった	0	NA
全然良くなかった	0	NA

表1に示されるように、このプロジェクトに対する学生の全体的な評価としては、概ね高い評価が得られた。その理由として挙げられたのは、いろいろなことが調べられたこと、ポスターを作ったり発表したりするのが楽しかったこと、コメントをもらえるのがうれしかったことなどの本取り組みの全体的な趣旨に深く関わるものから、日本語の発音練習ができたこと、Zoom 及びパワーポイントの使い方を練習できたことなどの限定的なものまで、多岐に渡った。このうち VE に関わる回答としては、他県の大学の学生からコメントをもらえるのがうれしかったとする回答だと考えられる。

3.2 VE を通した他大学の学生との交流による日本語学習意欲の喚起

本取り組みの目的の一つが、VE を通して他大学の学生と交流することで、受講学生たちの日本語学習意欲を喚起することであると 2.2 節に述べた。本節では、この目的にかか

る二つの質問の結果を報告する。質問③「あなたのプレゼンテーションについてブログに書かれたコメントについて、どう思いましたか」の結果を表 2 に示し、質問⑧「このプロジェクトを通して、日本語学習への意欲が増しましたか」の結果を表 3 に示す。この二つの質問のうち、質問③は特に日本語学習について質問したものではないが、VE によって得られたコメントが発表者の日本語学習意欲に与えた影響について併せて考察する。さらに質問③の自由記述回答は、筆者が幾つかの種類に分類し、「回答の種類」として左列に示す。表 3 には、質問⑧の選択回答数 (とその割合) を中列に、その選択肢を選んだ理由 (自由記述回答) を右列に示す。(1)

表 2 質問③「あなたのプレゼンテーションについてブログに書かれたコメントについて、どう思いましたか」に対する回答

回答の種類	回答数と割合	回答 (原文ママ)
コメントをもらえること自体への高評価	2 (22.2%)	<ul style="list-style-type: none"> ● (GS 2) I think it's great how many people commented on the presentations! Especially the opinions of the Japanese people were interesting, since we get to hear our classmates opinions all the time, but having a completely new perspective was really nice. ● (GS 3) 詳しいところまでアドバイスもらうことはとても良かったです。
コメントで自身の発表が高評価を得たことによる自己達成感・自信の獲得	2 (22.2%)	<ul style="list-style-type: none"> ● (TS 1) 思ったよりいいコメントをもらいました。 ● (GS 1) コメントのフィードバックによると、私のプレゼンテーションは大体成功だと思います。ポスターを見つつ、内容に沿ってが分かりやすくなるは私の目的なので、他の学生たちがそうもと思われてくれて良かったです。
コメントの助言に基づく反省・課題の認識	3 (33.3%)	<ul style="list-style-type: none"> ● (ChS 1) みんなはちゃんとビデオを見てコメントして誠にありがとうございました。褒め言葉が多いですけれども、未熟だと思って、これからも頑張ります。印象深いのは「重宝」という言葉の読み方の間違いを指摘してくれたことです。録画した時に全然気づかなかったのです。ありがとうございます。 ● (ChS 2) 内容が少なく、ポスターがよく作れなかったと思いました。次はもっと良くできそうです。 ● (ChS 3) みんなから一番問題が短いすぎです。他の発表と比べて、そういうと思います。コメントはいいと思います。
コメントに対する言及なし	2 (22.2%)	<ul style="list-style-type: none"> ● (TS 2) 他の人のプレゼンテーションから勉強ができるから、よかったですと思います。 ● (CaS 1) カメラの前に話すのが苦手な私にとって、ちょっと緊張したが、いい経験になった。

表3 質問⑤「このプロジェクトを通して、日本語語学習への意欲が増しましたか」に対する回答

回答選択肢	回答数と割合	左の回答を選んだ理由（原文ママ）
とても増した	2 (22.2%)	<ul style="list-style-type: none"> ● (TS 1) もっと日本語がうまくなりたいです。 ● (ChS 3) みんなの発音を聞いて、ペラペラようなかっこいいと思います。これを目指します。
少し増した	5 (55.6%)	<ul style="list-style-type: none"> ● (GS 1) 日本人の学生から、ポジティブな批評をもらったので、意欲が増しました。 ● (GS 3) 日本人が面白いと思うプレゼンテーションを作れるために、日本語がもっと得意になりたくりました。 ● (ChS 1) ポスター発表を通して、まだ不足しているところがあって、これからはさらに頑張ります。 ● (ChS 2) 旅行に行ったら、日本語ができないといろいろ不便だと思ったからです。 ● (CaS 1) あるプレゼンテーションの内容は難しかったので、もっと日本語の勉強を頑張らなければならないと感じた。
変わらない	2 (22.2%)	<ul style="list-style-type: none"> ● (TS 2) あまり自分で日本語の文章を書かなかったから、日本語の文法はあまり勉強できないと思います。 ● (GS 2) This class did not really challenge me in terms of my ability to speak and understand Japanese and hence I did not learn that much in that regard. I did however learn a few 読み方 or famous places or people, which is nice.
少し減った	0	NA
とても減った	0	NA

表2に示されるように、質問③「あなたのプレゼンテーションについてブログに書かれたコメントについて、どう思いましたか」に対する回答については、回答が同じような内容に偏ることなく、様々な反応が得られた。筆者が分類したところによると「コメントをもらえること自体への高評価」、「コメントで自身の発表に高評価を得たことによる自己達成感・自信の獲得」、「コメントの助言に基づく反省・課題の認識」などに回答がほぼ均等に別れ、多様な効果が得られたことが示唆された。この質問の回答の中では、特に日本語学習の意欲が喚起されたことに言及するものは少なかった。

しかし、表3に示される日本語学習意欲の増減を聞いた質問⑧「このプロジェクトを通して、日本語語学習への意欲が増しましたか」の結果からは、9名中7名から、意欲が「とても増した」あるいは「少し増した」という回答が得られた。自由記述回答に現れるその理由は様々であったが、特にVEを通して繋がった静岡県立大学の学生のコメントを意識していると思われるものは、「(GS 1) 日本人の学生から、ポジティブな批評をもらったので、意欲が増しました」、「(GS 3) 日本人が面白いと思うプレゼンテーションを作れ

るために、日本語がもっと得意になりたくなりました」という意見であった。これらの回答は、発表者が見ず知らずの日本人学生に発表を見せフィードバックをもらうという、VE による効果を示していると考えられる。

一方、自分以外の学生のポスタープレゼンテーションの影響を受けていると思われる回答もあり、「(ChS 3) みんなの発音を聞いて、ペラペラようなかっこいいと思います。これを目指します」、「(CaS 1) あるプレゼンテーションの内容は難しかったので、もっと日本語の勉強を頑張らなければならないと感じた」などがこれに該当する。

ただし、2名の学生 (TS 2、GS 2) が「変わらない」という選択肢を選び、このプロジェクトによって日本語学習意欲が増すことはなかったとしている。一人 (GS 2) は日本語の学習という意味では本取り組みは簡単すぎたことを示唆しているが、この学生はポスター作成に当たっての筆者による日本語の修正および静岡県立大学の学生のコメントから学ぶところはなかったと感じているようである。筆者による日本語の修正、また発表にあたっての発音指導等をより充実させる必要があったと考えられる。またもう一人 (TS 2) は自分で日本語の文章を書く機会が少なかったと述べているが、これについては、ポスター上の分量を筆者がある程度指示する必要があったということを示唆している。

3.3 三重県と母国を結ぶ広報大使としての成熟度 (質問⑤⑥⑦)

日本語学習意欲の喚起に加え、本取り組みの二つ目の目的は、三重県についての調査と発表を行った留学生が三重県と母国を結ぶ広報大使のような存在になることであるということをも 2.2 節で述べた。本節では、その達成度を測るため、三重県に対する理解の深まりを調べた質問⑤、三重県に対する愛着の深まりを調べた質問⑥、特に母国の人々にお勧めしたい三重県の名所を調べた質問⑦の結果を報告する。質問⑤「このプロジェクトを通して、三重県への理解度が増しましたか」の結果を表 4 に、質問⑥「このプロジェクトを通して、三重県への愛着が増しましたか」の結果を表 5 に、質問⑦「もし自分の国の人々が三重県に旅行するなら、どこに行くことをおすすめしますか」の結果を表 6 にまとめる。表 4、表 5 には質問の回答選択肢を左列に、それぞれの選択肢の回答数 (とその割合) を中列に、その選択肢を選んだ理由 (自由記述回答) を右列に示す。表 6 には、質問⑦に回答された三重県の名所を左列に、それぞれの場所の回答数を中列に示すが、複数の場所を回答した学生が何人かいたため、回答数 (17 件) は回答者数 (14 名) と一致しない。また、お勧めする場所にコメントを添えて書いた回答者もいたため、そのコメントも右列に記す。

表4 質問⑤「このプロジェクトを通して、三重県への理解度が増しましたか」に対する回答

回答選択肢	回答数と割合	左の回答を選んだ理由（原文ママ）
とても増した	3 (33.3%)	<ul style="list-style-type: none"> ● (GS 2) Not only did I learn about places or interesting spots I didn't know of before, but also important people and of Mie and its economy, which was quite fascinating. ● (ChS 2) 三重県の知らなかったところやものを知ることができたからです。 ● (ChS 3) いいところをよく調べられました。よく理解しました。
少し増した	5 (55.6%)	<ul style="list-style-type: none"> ● (ChS 1) 三重県の観光地や状況についてのビデオをみて、三重県に対する理解は増えました。 ● (TS 1) もっと詳しく内容が分かりました。 ● (TS 2) 大体のプロジェクトは観光地だから、三重県についての他のことはまだいっぱいだとおもいます ● (CaS 1) 皆さんが紹介したたくさんのところは自分が行ったことあるからである。 ● (GS 3) ポスタープレゼンテーションのために新しいテーマを選んだかたは少なかったなので、三重県への理解は少ししか増しませんでした。
変わらない	1 (11.1%)	<ul style="list-style-type: none"> ● (GS 1) ポスターを準備した皆さんが大体前の PPT 同じテーマについてポスターが作ったので、新しい学ぶことがあまりなかったと思います。
少し減った	0	NA
とても減った	0	NA

表5 質問⑥「このプロジェクトを通して、三重県への愛着が増しましたか」に対する回答

回答選択肢	回答数と割合	左の回答を選んだ理由（原文ママ）
とても増した	2 (22.2%)	<ul style="list-style-type: none"> ● (TS 2) プロジェクトを見ると、旅行したいからです。 ● (GS 2) Before coming to Mie and listening to all these presentations etc., I wasn't really sure how interesting this prefecture really is, but I came to realize that it has a lot to offer and that it is definitely worth coming here, even though it is quite 田舎。
少し増した	5 (55.6%)	<ul style="list-style-type: none"> ● (ChS 1) 最初は三重県が田舎だと思って、あまり魅力がないです。でも、やはり地味な県も発掘できる点もあります。 ● (ChS 2) 三重県のきれいな景色や食べ物をもっと好きになったからです。 ● (ChS 3) いい景色を多く知りました、行きたいです。 ● (TS 1) まだいろいろな観光地に行きたいです。 ● (GS 3) もうマックスだったからです。

変わらない	2 (22.2%)	<ul style="list-style-type: none"> ● (GS 1) 前より愛着が増しませんでした。紹介されたテーマは新しくないのですから。 ● (CaS 1) 三重県は素晴らしいところがたくさんあるとずっと知っていたので、愛着があまり変わなかった。
少し減った	0	NA
とても減った	0	NA

表 6 質問⑦「もし自分の国の人々が三重県に旅行するなら、どこに行くことをおすすめしますか」に対する回答

回答の種類	回答数と割合	自由記述コメント (原文ママ)
伊勢神宮	4 (23.5%)	● (ChS 1) やはり伊勢神宮です。伊勢神宮内宮の近くにあるうどん屋はとても美味しいです。おすすめです。
夫婦岩	3 (17.6%)	● (TS 2) 綺麗な場所で日本の伝統的と文学も楽しめるからです。
鳥羽	3 (17.6%)	● (TS 1) 私はまだとばに行くことがないので、ただ一緒に行くならいいと思います。また鳥羽はいろいろな観光地があります。例えば、みきもととか鳥羽水族館。
横山展望台	3 (17.6%)	● (CaS 1) 三重県について言うと伊勢神宮やなばなの里や伊賀流博物館などよく知られているので、別のあまり知られていないところを紹介したい。そのため私が紹介した横山展望台を進めたい。
赤目四十八滝	2 (11.8%)	● (GS 1) その場所は綺麗だし、日本の自然が楽しめるし、いい経験だと思います。
ナガシマ スパランド	1 (5.9%)	
山の方の自然	1 (5.9%)	

まず、三重県への理解度についての質問⑤への GS 1 と GS 3 の回答 (表 4)、そして三重県への愛着についての質問⑥への GS 1 の回答 (表 5) が、本取り組みのプレゼンテーションが新しいテーマではなかったため学ぶところが少なかったとしていることについて説明したい。前述 (2.3.1) の通り、7月の本取り組みに先立って、5月に本科目の受講生達は三重県に関する何かのパワーポイント作成を行っており、全 10 名の受講生のうち 6 名が、その 5月のパワーポイント作成に選んだテーマと同じテーマを、7月の本取り組みでも扱った。そのため、その 6名のポスター発表の内容は 5月の時点で既習であったことが、これら GS 1 と GS 3 の回答に反映されていると考えられる。

(前段に説明された GS 1 と GS 3 の回答を除き) 表 4 および表 5 に見られる質問⑤、

⑥への回答からは、概ね三重県への理解度および愛着が増したものと解釈できる。三重県への理解度と愛着が増した理由としては、自身の発表のために三重県のことについて調査ができたから、または自分以外の学生の発表を見ていろいろな場所を知ることができたからということが多い。後者の理由づけについては、特に質問⑤と質問⑥に対して「とても増した」と回答したそれぞれ2名の学生の、これまで知らなかった三重県のところなどを知ることができたとする記述に反映されている。また、表6に示される、質問⑦「もし自分の国の人々が三重県に旅行するなら、どこに行くことをおすすめしますか」に対する回答についてであるが、5名が、自分自身が発表したテーマとは別の場所（他の学生が発表した場所）をお勧めの旅行先として挙げている。この結果からは、学生達が、自分が詳しく知らなかった場所についての自分以外の学生のポスター発表を見ることによってその場に魅力を感じたという可能性が示唆される。

5. おわりに

本稿は、外国人留学生を対象とした三重大学の科目において、VEを用いて、他県の大学生に三重県について発表する取り組みの実践を報告したものである。その目的は、第一に日本語学習意欲を喚起すること、第二に三重県と母国をつなぐ広報大使のような人材を育成することであった。第一の日本語学習意欲については、見ず知らずの他県の大学生に発表を視聴してもらい、コメントを得ることによって、自分の日本語能力に対する自信の獲得や課題の認識などの効果が得られ、さらに自分以外の学生のポスター発表を視聴することによっても日本語学習への意欲が喚起されたことが確認された。また、第二の目的である三重県と母国をつなぐ広報大使となり得る可能性についても、アンケートへの回答から、一定の効果が得られたと解釈できる。ただし、本取り組み前後における日本語学習意欲（表3）、三重県への理解度（表4）、三重県への愛着（表5）の増減を調べた質問への回答として、最上位の選択肢（「とても増した」）を選んだ学生は少なかったことに留意する必要がある。これらの質問に対して最も多くの回答数を集めたのは「少し増した」という選択肢であり、受講学生達が担当教員である筆者に対して付度した可能性も考慮すると、筆者が期待したような効果が十分に得られたとは断言できない。実際に本取り組みの目的が達せられたかについては、来学期以降も本取り組みと同様VEを用いた試みと事後アンケート調査を行い、学生に及ぼされる効果を継続的に調査することが必要であると考え。さらに、次回以降の取り組みにおいては、学習効果を高めるために、他大学の学生と相互にプレゼンテーションを視聴しあう取り組みについて検討することを記し、本稿の結語としたい。

[注]

- (1) 本稿 3.2 節に報告される内容のうち、表 2 に示される「VE を通じた他大学の学生との交流による日本語学習意欲の喚起」については、正路 (2021) 「COIL による交流活動と日本語学習意欲の喚起 (印刷中)」『全国語学教育学会日本語教育研究部会ニュースレター』 vol.17 (3) においても報告予定である。

参考文献

- 池田佳子 (2016) 「「バーチャル型国際教育」は有効かー日本で COIL (Collaborative Online International Learning) を遂行した場合」『国際交流』 vol.67, 1-11.
- 正路真一 (2021) 「COIL による交流活動と日本語学習意欲の喚起 (印刷中)」『全国語学教育学会日本語教育研究部会ニュースレター』 vol.17 (3).
- Hagley, Eric (2016) 「Single and dual language virtual exchange for language learning」『東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会研究収録』 vol.65, 26-32.
- Hagley, Eric Thomas & Harashima, Hideto. (2017). Raising the intercultural understanding and skills of EFL students through virtual exchange on moodle. *Proceedings of Moodlemoot Japan Annual Conference*, vol.5, 28-33.

実践報告

インターンシップによる外国人留学生の日本での 就職に対する意欲の変化について — 終了後のアンケート結果から —

正路 真一・福岡 昌子・松岡知津子

Effects of Internship on International Students' Motivations to Work in Japan: Post-internship Questionnaire Research

SHOJI Shinichi, FUKUOKA Masako, MATSUOKA Chizuko

〈Abstract〉

The objective of this research is to investigate whether an experience of internship in Japan would motivate international students to obtain a full-time job in Japan. The results of the questionnaires for the international students who participated in internships show that the motivation increased for a half of the students, yet the motivation was not high enough for them to decide to work in Japan. Moreover, motivations of the students, who had already had clear career plans in the future, did not change before and after the internship.

キーワード：インターンシップ、留学生、就職、アンケート、意欲の変化

1. はじめに

本稿は、三重大学地域人材教育開発機構グローバル人材教育開発部門が、外国人留学生を対象として実施した、三重県内企業・団体でのインターンシップ終了後のアンケートの結果に基づいて、外国人留学生たちの就職に対する意欲にどういった変化が見られたかを調査したものである。ここでいう意欲の変化とは、彼、彼女らがインターンシップの経験を通して、日本で就職したいという意欲が増したか（または意欲が生まれたか）、またインターンシップ先の企業に就職することについて欲が増したか（または意欲が生まれたか）ということである。

2. インターンシップの効果

2014年に文部科学省・厚生労働省・経済産業省がまとめた「インターンシップの推進に立っての基本的考え方」¹⁾によると、インターンシップに参加することにより「学生が自己の職業適性や将来設計について考える機会となり、主体的な職業選択や高い職業意識の

育成が図られる。また、これにより、就職後の職場への適応力や定着率の向上にもつながる」ことがインターンシップの効果として挙げられている。また、日本人学生のインターンシップを対象とした先行研究²⁻⁴⁾によると、インターンシップに参加することにより、「働くことは楽しいと思った (pp.69-70)」²⁾、「社会人になることが楽しみになってきた (pp.175-176)」³⁾「就職活動への意識が高まった (p.33)」⁴⁾、「こういう職場で働きたいと思えるインターンシップだった (p.33)」⁴⁾ などとする学生の感想が多く報告されている。こうした報告は、インターンシップが就職に対する学生の意欲を増すことを示唆している。

本稿は、前段の先行研究が主張しているような、インターンシップによって就職意欲が喚起されるという効果が、筆者らが実施している外国人留学生を対象としたインターンシップにおいても得られたか否かを調べたものである。本稿の調査対象としたのは筆者らが 2017 年度以来継続的に実施しているインターンシップ事業の中で、特に 2018 年度後期から 2019 年度にかけてのインターンシップに参加した留学生のアンケート回答に基づくものである。これに先立って、2017 年度から 2018 年度に実施したインターンシップ事業では、その参加学生の多くが短期留学生、交換留学生であったことから、就職につながるものとしてよりも日本語演習の場としてインターンシップを実施したのだが、参加留学生へのアンケートの中で「就職に役立つ」という感想が散見された⁵⁾。そこで 2018 年度後期からのインターンシップにおいては、終了後アンケートの質問を改定し、就職に関する質問を加えた上で実施した。その就職に関する質問への回答と考察を、本稿で報告する。

3. インターンシップの概要

インターンシップ終了後アンケートに回答した外国人留学生の基本的情報とその受け入れ先企業・団体、およびインターンシップ時期・日数を表 1 にまとめる。表 1 の「受け入れ企業・団体」の列には同じ企業または団体の名前が複数回現れているが、これは同一の企業・団体が複数回インターン留学生を受け入れたことを意味する。また、「インターン留学生の出身国・性別」の列にはアルファベットが付記されているものがあるが、これは同一の留学生であるか否かを示すものである。例えば「韓国・男 A」が複数回現れているが、これは同一人物であり、「韓国・男 B」とは別人である。従って、この報告の対象となった受け入れ企業・団体は計 9 つ (延べ 14) であり、インターン留学生は計 14 名 (延べ 17 名) である。このうち、⑪の韓国人学生の時期・日数として、もともとの日数を短縮して中止したという記述があるが、これは、当該留学生がインターンシップ初日終了後に残りの日程の参加を止めたいと申し出たものである (理由は表 3 の回答 b を参照)。

大部分のインターン留学生は留学期間が 1 学期ないしは 2 学期の短期留学生であるが、

これは筆者らが受け持つ授業を受講している学生の大多数が短期留学生であるため、口頭で参加を呼びかけることができたのが主に短期留学生であったことに起因すると思われる。なお、本インターンシップ事業に関連するその他の詳細（インターンシップの時期と期間の設定、インターンシップ事前学習としてのビジネス日本語講座の実施等）は別稿⁵⁾に詳しく報告されている。

表1 インターン留学生と受け入れ企業・団体一覧

受け入れ企業・団体（受け入れ時期・日数）	インターン留学生の出身国・性別（短期・正規）
① 国際交流団体（2018年度11月・5日間）	韓国・男A（短期留学生）
② 日韓交流団体（2018年度11月・1日間）	韓国・男A（短期留学生）
③ 日韓交流団体（2018年度11月・1日間）	中国・女A（短期留学生）
④ リゾート宿泊施設（2018年度11月・5日間）	中国・女B（短期留学生）
⑤ 観光施設（2018年度3月・5日間）	タイ・男A、タイ・男B（短期留学生）
⑥ IT企業（2019年度5?7月・10週間）	フランス・男（短期留学生）
⑦ 日韓交流団体（2019年度6月・2日間；ただしスウェーデン出身の学生は初日だけ参加）	韓国・男B（短期留学生）
	イギリス・女A（短期留学生）
	スウェーデン・女A（短期留学生）
⑧ リゾート宿泊施設（2019年度6月・4日間）	イギリス・女A（短期留学生）
⑨ 国際交流団体（2019年度6月・5日間）	スウェーデン・女A（短期留学生）
⑩ 農業関係企業（2019年度7月・1日間）	中国・男A（短期留学生）
⑪ 国際交流団体（2019年度7月・1日間；もともと3日間の予定だったものを初日限りで中止）	韓国・女（正規学部生）
⑫ 英会話教室（2019年度8月・3日間）	インドネシア・女（正規大学院生）
⑬ 国際交流団体（2019年度11月・4日間）	中国・女C（短期留学生）
⑭ リゾート宿泊施設（2019年度11月・4日間）	中国・男B（大学院研究生）

表1に示されたインターンシップの終了後に、参加留学生を対象としてアンケートを実施した。実際のアンケートでは11個の質問を設けたが、問1~11のうち、就職に関わるものは下の問5、6、7の三つである。

- 質問5. 日本で就職することについて、今、どう思いますか。（回答選択肢を選び、その選択肢を選んだ理由を自由記述）
- 質問6. インターンシップをして、日本で就職することについて気持ちが変わりましたか。（回答選択肢を選び、その選択肢を選んだ理由を自由記述）

- 質問 7. 今回インターンシップをした会社に就職したいと思いますか。(回答選択肢を選び、その選択肢を選んだ理由を自由記述)

この三つ以外の質問の結果についての考察は稿を改めることとし、本稿はこの質問 5、6、7 に絞ってインターン留学生の回答を報告、考察する。なお、質問 5、6、7 以外の質問と回答選択肢を含めたアンケートの全体^{註 1}については文末注に示す。

4. アンケート調査の結果

4.1 日本で就職することについてどう思うか

この節では、「5. 日本で就職することについて、今、どう思いますか」という質問に対する留学生の回答を報告する。この質問に対して筆者らが与えた回答選択肢と、その回答選択肢を選んだ理由を書かせた自由記述回答を含め、表 2 にまとめて記す。それぞれの自由記述回答の後に回答学生とその学生のインターンシップ先を付記する。また、自由記述回答に併記したインターンシップ先と学生情報は（「①国際交流団体／韓国・男」など）、表 1 と対応している。なお、自由記述回答における日本語の文法、語彙等の間違いについては、筆者らが修正の上表に記述する。

表 2 アンケート結果：質問 5「日本で就職することについて、今、どう思いますか」

回答選択肢	回答数 (計 14) および自由記述回答 (左の回答選択肢を選んだ理由)
a. 日本で実際に就職したいと考えている	回答数 4 (28.6%) ● 自由記述回答： ・インターンシップの雇い主や周りの田舎の人が優しかった。伊勢志摩で、このゲストハウスのような仕事をして働きたい。(⑧リゾート宿泊施設／イギリス・女 A) ・日本の仕事の習慣が好きだから。(⑥IT 企業／フランス・男) ・日本の先進技術を学びたいから。(⑦日韓交流団体／韓国・男 B) ・家族の原因 (③日韓交流団体／中国・女 A)
b. 日本で就職することに興味はあるが、まだ実際に就職するかどうかわからない	回答数 5 (35.7%) ● 自由記述回答： ・就職についてまだ考えていないから (⑭リゾート宿泊施設／中国・男 B) ・日本で就職するか母国で就職するかまだ考えている。(④リゾート宿泊施設／中国・女 B) ・日本の会社の給料、福祉の情報がわからないからまだ悩んでいる。(①国際交流団体・②日韓交流団体／韓国・男 A) ・自分の力がまだ足りないと思う (⑤観光施設／タイ・男 A) ・インターンシップの仕事は楽しかったがまだ分からない (⑦日韓交流団体・⑨国際交流団体／スウェーデン・女 A)

c. 日本で就職することに興味はあるが、多分しないと思う	回答数 3 (21.4%) ● 自由記述回答： ・母国で国際交流に関わる仕事がしたいから。(⑬国際交流団体／中国・女 C) ・他にやりたいことがあるから。(⑤観光施設／タイ・男 B) ・記述なし (⑩農業関係企業／中国・男 A)
d. 日本で就職したいと思わない	回答数 2 (14.3%) 自由記述回答： ・記述なし (⑪国際関係団体／韓国・女；⑫英会話教室／インドネシア・女)

表 2 に示される回答を、日本での就職に意欲的な回答（「a. 日本で実際に就職したいと考えている」）、日本での就職に意欲的でも消極的でもない回答（「b. 日本で就職することに興味はあるが、まだ実際に就職するかどうかわからない」）、日本での就職に消極的な回答（「c. 日本で就職することに興味はあるが、多分しないと思う」および「d. 日本で就職したいと思わない」）の 3 種類に分けると、その回答数は順に 4、5、5 と均衡した結果となった。

日本での就職に意欲的な回答（選択肢 a）をした 4 名の学生、および意欲的でも消極的でもない回答（選択肢 b）をした 5 名の学生の自由記述回答の内容は様々であり、一定の傾向を見出すことはできなかった。（また選択肢 a を選んだ中国人の女子学生 A の「家族の原因」という自由記述回答は、その意味するところが不明である。）一方、日本での就職に消極的な回答（選択肢 c, d）をした 5 名の学生のうち 2 名（⑬国際交流団体／中国・女 C；⑤観光施設／タイ・男 B）は、自身に明確な目的意識があり、それが日本での就職に繋がらないという点で共通している。また、日本での就職に消極的な学生には、自由記述回答の記述がない学生が 2 名いた。

4.2 インターンシップをして日本で就職することに対する気持ちが変わったか

この節では、「6. インターンシップをして、日本で就職することについて気持ちが変わりましたか」という質問の回答を表 3 にまとめて報告する。ただし、当該質問への回答が、「日本での就職」に対する気持ちというよりも、質問 7 で聞いている「インターンシップ先への就職」に対する気持ちを書いていると判断される学生がおり（⑧リゾート宿泊施設／イギリス・女 A など）、これらの学生は質問 6 と質問 7 を混同している可能性があることを留意する必要がある。

表 3 アンケート結果：質問 6「インターンシップをして、日本で就職することについて気持ちが変わりましたか」

回答選択肢	回答数 (計 14) および自由記述回答 (左の回答選択肢を選んだ理由)
a. 就職したいという気持ちが増した	回答数 7 (50.0%) ● 自由記述回答： ・インターンシップ先で、田舎の人々が優しく、協力して働いていることを知った。自然環境にも恵まれた人々が良い雰囲気を作っており、私もその中で働きたいと思った。(⑧リゾート宿泊施設／イギリス・女 A) ・インターンシップ先の職場の雰囲気が良かったから。(①国際交流団体・②日韓交流団体／韓国・男 A；⑤観光施設／タイ・男 A) ・社員の方々が優しくかったから。(③日韓交流団体／中国・女 A；④リゾート宿泊施設／中国・女 B) ・インターンシップでやった、外国人を助ける仕事が、自分が求めている仕事だった。(⑦日韓交流団体・⑨国際交流団体／スウェーデン・女 A) ・記述なし (⑭リゾート宿泊施設／中国・男 B)
b. 就職したいという気持ちが減った	回答数 1 (7.1%) ● 自由記述回答： ・インターンシップ先の 1 人の職員の、人を見下す態度が嫌だったから。(⑩国際関係団体／韓国・女)
c. 変わらない	回答数 6 (42.9%) ● 自由記述回答： ・もともと日本で働きたいと思っていた。(⑥IT 企業／フランス・男) ・もともと日本で就職する意思はない (⑫英会話教室／インドネシア・女) ・インターンシップ先の仕事は自分の専攻とは関係なかったから。(⑦日韓交流団体／韓国・男 B) ・記述なし (⑤観光施設／タイ・男 B；⑩農業関係企業／中国・男 A；⑬国際交流団体／中国・女 C)

表 3 に示される回答を、日本での就職意欲が増したことを意味する回答（「a. 就職したいという気持ちが増した」）、日本での就職意欲が減退したことを指す回答（「b. 就職したいという気持ちが減った」）、変化がなかったという回答（「c. 変わらない」）の 3 つに分けると、その回答数は順に 7、1、6 となっている。就職意欲を削がれた留学生は 1 人しかおらず、留学生のインターンシップ経験が、就職意欲を増進したかあるいは変化を与えなかったかのどちらかであるという結果が得られた。

4.3 今回のインターンシップ先の企業・団体に就職したいと思うか

この節では、「7. 今回インターンシップをした会社に就職したいと思いますか」という質問の回答を表 4 にまとめて報告する。この質問に関しては、複数のインターンシップに参加した学生がそれぞれのインターンシップ先について異なる回答をしている場合（韓

国・男 A；スウェーデン・女 A）と、複数のインターンシップに参加した学生が一つのインターンシップ先についてのみ回答した場合（イギリス・女 A）とを含んでいるため、回答数は延べ 16 となっている。

表 4 に示される通り、インターンシップ先への就職に意欲的な回答（「a. したいと思う」）は 6 名、消極的な回答（「b. したいと思わない」）は 9 名、そのどちらでもない回答（「c. 分からない」）は 1 名であった。つまり消極的な回答が優勢となった。

インターンシップ先に就職したいと思うと回答した学生の理由は様々であり、一定の傾向を見出すことは難しい。一方インターンシップ先に就職したいと思わないと回答した学生は、大きく 2 つのグループに、つまり他にやりたいことがあることを理由に挙げた 6 名の学生と、インターンシップ先の仕事が自分の目指すものでなかったことを理由に挙げた 3 名の学生に分けられる。

表 4 アンケート結果：質問 7「今回インターンシップをした会社に就職したいと思いますか」

回答選択肢	回答数（計 16）および自由記述回答（左の回答選択肢を選んだ理由）
a. したいと思う	回答数 6（37.5%） ● 自由記述回答： ・雇い主や周りの田舎の人が優しかった。（⑧リゾート宿泊施設／イギリス・女 A） ・人と関わる仕事が素敵だと思ったから。（①国際交流団体／韓国・男 A） ・母国の文化を紹介することに興味が湧いたから。（⑦日韓交流団体／韓国・男 B） ・インターンシップでやった外国人を助ける仕事が、自分が求めている仕事だった。（質問 6 の回答と同じ）（⑨国際交流団体／スウェーデン・女 A） ・記述なし（②日韓交流団体／韓国・男 A；⑩農業関係企業／中国・男 A）
b. したいと思わない	回答数 9（56.3%） ● 自由記述回答： ・日韓関係に限らない国際的な仕事がしたいから。（⑦日韓交流団体／スウェーデン・女 A） ・自分がやりたい仕事は、インターンシップ先でやった業務とは違ったから。（⑥IT 企業／フランス・男） ・他にやりたいことがあるから。（⑬国際交流団体／中国・女 C；⑤観光施設／タイ・男 A；⑤観光施設／タイ・男 B） ・母国で就職したいから。（⑫英会話教室／インドネシア・女） ・ホテル業は体力的にしんどいから。（⑭リゾート宿泊施設／中国・男 B） ・自分は中国人だから、インターンシップ先である韓国系の団体には適さない。（③日韓交流団体／中国・女 A） ・インターンシップ先の職員の、人を見下す態度が嫌だったから。（質問 6 の回答と同じ）（⑪国際関係団体／韓国・女）

c. 分からない	回答数 1 (6.3%) ● 自由記述回答： ・日本で就職するか母国で就職するかまだ考えている。(質問 5 の回答と同じ) (④リゾート宿泊施設/中国・女 B)
----------	--

5. 結語と課題

本稿は、外国人留学生を対象としたインターンシップが、留学生の日本での就職意欲に変化を与えるかどうかを調べたものである。結論としては、変化を与えられる学生は一定数いるものの、インターンシップの前に既に自分がやりたいことを確立している学生には変化が見られないとまとめられる。ただし、本調査の中で未だ不明な点は、前章の最後に述べた「日本での就職意欲の増減に寄与する最も大きな理由は、インターンシップ先企業の職員の親切さや職場の雰囲気の良さであるが、これが必ずしもそのインターンシップ先への就職意欲に繋がるわけではない」という点かと思われる。インターンシップ先の職員が親切で職場の雰囲気が良いことによって、日本で就職したくはなるが、そのインターンシップ先には就職したくないとは、筋が通っていないように思われる。この結果をもたらした留学生の心理を解明することが今後の課題である。

注

アンケート全文は以下の通りであった。

1. どんな仕事をしましたか。
2. インターンシップの全体的な感想を教えてください。
 - a. とても良かった
 - b. まあまあ良かった
 - c. 良くも悪くもなかった
 - d. あまり良くなかった
 - e. 全然良くなかった
 - f. その他：_____

→ どうしてその回答を選びましたか：
3. 大変だったことは何ですか。
 - a. 仕事がつまらなかった
 - b. 仕事がいそがしかった
 - c. 仕事がむずかしかった
 - d. 日本語がむずかしかった I
 - e. 会社の人とのコミュニケーションが難しかった

- r. 通勤が大変だった
 - g. その他： _____
 - h. なかった
4. インターンシップをして、前より日本語が上手になったと思いますか。
- a. 上手になったと思う
 - b. 変わらないと思う
- どうしてその回答を選びましたか：
5. 日本で就職することについて、今、どう思いますか。
- a. 日本で実際に就職したいと考えている
 - b. 日本で就職することに興味はあるが、まだ実際に就職するかどうかわからない
 - c. 日本で就職することに興味はあるが、多分しないと思う
 - d. 日本で就職したいと思わない
- どうしてその回答を選びましたか：
6. インターンシップをして、日本で就職することについて気持ちが変わりましたか。
- a. 就職したいという気持ちが増した。
 - b. 就職したいという気持ちが減った。
 - c. 変わらない
- どうしてその回答を選びましたか：
7. 今回インターンシップをした会社に就職したいと思いますか。
- a. したいと思う
 - b. したいと思わない
 - c. わからない
- どうしてその回答を選びましたか：
8. このインターンシップを、後輩の留学生におすすめしますか。
- a. おすすめする
 - b. おすすめしない
- どうしてその回答を選びましたか：
9. このインターンシップを、後輩の学生がすることが決まったら、その後輩にアドバイスはありますか。
10. このインターンシップについて、「改善したほうがいい」、「直したほうがいい」と思うことは何ですか。
11. その他のコメント・感想

参考文献

- (1) 文部科学省・厚生省労働・経済産業省：インターンシップの推進に立っての基本的考え方 (2004) (http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/intern/sanshou_kangaekata.pdf 2020年6月4日閲覧)
- (2) 佐藤博樹・堀有希衣・堀田聡子：人材育成としてのインターンシップ, 労働新聞社 (2006)

- (3) 浅海典子：学生にとってのインターンシップの成果とその要因,国際経営フォーラム, Vol.18, pp.163-179 (2007)
- (4) 平尾元彦：インターンシップの就職活動への影響－山口大学 2010 年度 4 年生へのアンケート調査と内定状況調査に基づく考察－, 大学教育, Vol.8, pp.29-36 (2011)
- (5) 正路真一・福岡昌子・松岡知津子：外国人留学生を対象とした三重県内インターンシップ実践：留学生を対象としたアンケート結果から, 三重大学国際交流センター紀要, Vol.14, pp.37-51 (2019)

企業が外国人留学生に求めるもの

— インターン受け入れ企業・団体へのアンケート調査から —

正路 真一・福岡 昌子・松岡知津子

What Companies Require for International Students: A Questionnaire Research with Companies that Accepted International-Student Interns

SHOJI Shinichi, FUKUOKA Masako, MATSUOKA Chizuko

〈Abstract〉

This study reports the outcome of a questionnaire-based research, which was conducted with companies and organizations that accepted international students as interns. The objective of the research was to find what abilities are required for international students to work for the Japanese companies and organizations. The results indicated that the companies and organizations think that many international students need to improve their Japanese language proficiency.

キーワード：インターンシップ、企業・団体、留学生、就職、アンケート

1. はじめに

日本の就職マーケットにおいて外国人材の活用が叫ばれて久しい。外国人は日本人とは異なる視点をもって日本の成長戦略に資すると考えられ、さらに少子高齢化に伴う労働力不足を緩和するリソースとしても期待されている（守屋 2012, 島田 2017, 柳 2017, 平田 2011, 末廣 2013, 中橋・ショーン 2018, 猪俣・高橋・富田 2018）。一方、外国人留学生たちも、日本での就職を希望する者が増え続けている。日本学生支援機構（JASSO）が日本の高等教育機関（専門学校、語学学校含む）に在籍する外国人留学生を対象として2～3年毎に実施している「私費外国人留学生生活実態調査」の進路希望調査の詳細を表に示す。なお、2009年、2011年の調査の回答選択肢と2013年、2015年、2017年の調査の回答選択肢が異なっている（「起業」という選択肢の有無）ので、それぞれ表1、表2に分けて示す。

表 1 2009 年、2011 年の外国人留学生の進路希望 (複数回答可)
(JASSO「平成 21 年度・平成 23 年度私費外国人留学生生活実態調査」を基に作成)

	2009 年	2011 年
日本において進学希望	44.6%	49.6%
日本において就職希望	56.9%	52.2%
出身国において進学希望	3.6%	4.2%
出身国において就職希望	28.5%	27.8%
日本・出身国以外の国において進学希望	10.3%	8.5%
日本・出身国以外の国において就職希望	7.6%	7.2%
まだ決めていない	7.1%	5.7%
不明	2.0%	1.4%

表 2 2013 年、2015 年、2017 年の外国人留学生の進路希望 (複数回答可)
(JASSO「平成 25 年度・平成 27 年度・平成 29 年度私費外国人留学生生活実態調査」を基に作成)

	2013 年	2015 年	2017 年
日本において進学希望	45.2%	50.4%	51.5%
日本において就職希望	65.0%	63.6%	64.6%
日本において起業希望	8.7%	10.8%	10.8%
出身国において進学希望	3.4%	5.3%	5.7%
出身国において就職・起業希望	26.4%	20.0%	18.4%
日本・出身国以外の国において進学希望	5.7%	5.9%	6.2%
日本・出身国以外の国において就職・起業希望	4.0%	5.8%	5.2%
まだ決めていない	4.0%	6.0%	5.2%
不明	0.3%	0.8%	1.0%

表 1 および 2 から分かるように、(少なくとも 2009 年から直近の 2017 年の JASSO の調査結果において) 外国人留学生の卒業後の進路希望として常に最も多くの回答を得ているのは「日本における就職」であり、その数値が 50% を切ったことはない。また、その次に多くの回答を得ているのは常に「日本での進学希望」であり、その数値も常に 40% 以上である。これらから、日本に留まることを希望する外国人留学生がいかに多いかがうかがえる。

2. 外国人留学生の就職を困難とする要因

前章で示したように、多くの外国人が日本での就職を望んでいるとは言え、外国人留学

生たちにとって日本での就職は容易ではない。本章では、外国人留学生の就職を困難とする要因について、先行研究の指摘から考えてみたい。外国人留学生が日本で就職を志す場合にまずその壁となるのが、日本独特の就職活動の形態である。例えば、自己分析とエントリーシートの記入、SPI筆記試験、グループ面接や集団面接を含む複数回の面接などの多様な審査が複合的に組み合わせられた日本の就職活動は、留学生にとっては全体的な流れが分かりにくい（リクルート 2017, 中橋・ショーン 2018）。そしてこうした多様な段階を含む就職活動が実際に就職する一年以上前から開始するというスケジュールの長さも、外国人留学生には想定しにくいものである（守屋 2012, 正路・福岡・松岡 2019）。福岡・趙（2011）の企業を対象としたアンケート調査（回答社数 300 社）では、採用の方法として「教育機関（大学等）からの紹介（37.0%）」が最も多く、次いで「従業員・取引先等からの紹介（18.5%）」が多いと報告されているが、この結果は、通常の煩雑な就職活動を通して職を得るよりもコネクションをきっかけに就職に成功している留学生が多いという可能性を示唆している。さらに、こうした長い過程のなかで、学生の能力や専門性が審査されることは少なく、適正、性格診断、やる気の有無、印象に基づく判断などを基準として採用の可否が決まることも、職務主義の慣行を取っている海外諸国の留学生にとっては理解しがたい（中橋・ショーン 2018）。

加えて、日本人とは異なる発想や視点を持つ人材として外国人留学生が注目されていることは前述のとおりであるが、これに相反して企業側が求める人材は特に外国人である強みを生かせるものである場合が少ないことも、外国人留学生の就職促進を阻んでいる理由であると考えられる。例えば、株式会社ディスコ（2010）の企業を対象とした調査によると（回答社数 923 社）によると、7 割以上の企業が、文系、理系共に留学生の採用において日本人と区別することはないとしており、また文部科学省（2019）の企業を対象とした調査によると、就職活動において外国人留学生に重視してほしい点として最も多く挙げられたのが日本語能力（回答 38.9%）であり、次いで多く挙げられているのが、日本企業における働き方を理解すること（回答 36.9%）である。また、先に挙げた福岡・趙（2011）の調査では、留学生に求める最低限の能力として、「日本語での会話ができること（60.0%）」と「日本の会社で長期間働く意欲と心構えが明確であること（49.0%）」が全回答の大半を占めている。日本語能力に関しては、企業が外国人留学生に求める日本語能力の水準は実務を遂行するに足るレベルの日本語能力であり、これは留学生たちが大学で学ぶことができる日本語能力とは全く異なると言える。企業が求める日本語能力とは接客、営業、電話やメールでの対応、そして会議に適應できるレベルのものである（守屋 2012, 中原・ショーン 2018）。しかし大学で習得できる日本語能力とはレポートの作成やプレゼ

ンテーション、ディスカッションをすることができる程度のものであり、留学生の就職支援として「ビジネス日本語講座」や「ビジネスマナー講座」を実施している大学でも企業の期待を満たすレベルの内容はカバーできていないのが現状である (守屋 2012)。その結果、実務を遂行できるほどの日本語能力を備えている外国人留学生は極めて少なく (恒松 2011, 2014)、企業がビジネスで通用すると判断できるレベルの日本語能力は多くの留学生が学生時代に習得できていない (向山・村野・山辺 2019)。ただし一点留意すべきは、「実務遂行能力の不足」とは、日本語能力の不足による実務遂行能力の不足と、語学力とは無関係に、経験不足等による実務遂行能力の不足の両方を含んでいると考えられることである。実務遂行能力の不足が語学力の不足に起因しているかどうかを見極めるのは困難であるが、本稿では、実務遂行不足が語学力不足と関わるケースに焦点を当てることとする。

上記に加え、外国人が日本企業で働くには「和を以て貴しとなす」といった日本の文化に順応する必要がある。同質性と集団性を重んじ、相手を傷つける、困らせる、相手に恥をかかせる、といった言語行動を極力避ける傾向が高い日本人は、直接的な言語表現を避け、メッセージが正確に伝わっているかどうかをある程度受信者の解釈に任せなければならない (楊・曹 2015)。そのため、受信者にはメッセージの趣旨を察する能力が求められるが、この「察し」の能力は外国人留学生にとっては習得が難しい。守屋 (2012) の報告によると、「(外国人の就業者にとって) 日本人従業員からのメールはメールの趣旨がわからない場合が多く、メールの発信者の日本人従業員にそのメールの趣旨を電話で確認をした」という意見が挙げられた。

上記の先行調査報告から読み取れるのは、外国人としての強みを持った人材ではなく、「より日本人化した留学生 (守屋 2012, p.32)」、つまり日本人と同じように働ける能力を有した人材が求められているのであり、新卒採用人材に期待される要件は日本人学生に求められるものと変わらないと言える (山本・糸川・渋谷・副島・戸坂・星野 2008)。この基準に鑑みると外国人留学生が日本人学生に先んじて採用される要素はほぼないように思われる。

3. 調査の概要

前章に、外国人留学生が日本で就職に苦戦する要因として、①日本独特の就職活動の形態、②日本語能力の不足とこれに伴う実務能力の不足、③日本的な「和」の文化に適應する必要性、の3つを挙げた。本稿では、この中で特に②日本語能力の不足とこれに伴う実務能力の不足について、外国人留学生をインターンとして受け入れた企業・団体を対象

アンケートを行い、企業・団体が外国人留学生の実務能力、日本語能力をどう評価したかを調査した。

筆者らは2017年から継続して三重大学の外国人留学生を対象とした三重県内企業・団体におけるインターンシップ事業を実施しているが、インターンシップが終了した後、インターン留学生及び受け入れ企業・団体を対象とした終了後アンケートを行っている。本稿は特に2018年度後期から2019年度に実施した留学生インターンシップの中で、アンケートを提出した受け入れ企業・団体の回答を報告するものである。アンケートに回答して提出した企業・団体の一覧を、その企業・団体でインターンシップを行なった留学生の基本的情報およびインターンシップ時期・日数を表3にまとめて示す。なお、同一の企業・団体が複数の期間に異なるインターン留学生を受け入れた例が多くあった。具体的には、表3の受け入れ企業・団体を示した左列の①、⑦、⑩は同一の団体、②、③も同一の団体、そして④、⑪も同一の企業である。また、インターン留学生を示した右列の中で①、②にある「韓国・男A」は同一人物であるが、その他の留学生は全て別人である。

表3 インターン留学生受け入れ企業・団体一覧

受け入れ企業・団体	受け入れ時期・日数	インターン留学生の出身国・性別 (短期留学生または正規学生)
①国際交流団体	2018年度11月(5日間)	韓国・男A(短期留学生)
②日韓交流団体	2018年度11月(1日)	韓国・男A(短期留学生)
③日韓交流団体	2018年度11月(1日)	中国・女A(短期留学生)
④リゾート宿泊施設	2018年度11月(5日間)	中国・女B(短期留学生)
⑤観光施設	2018年度3月(5日間)	タイ・男A、タイ・男B(ともに短期留学生)
⑥リゾート宿泊施設	2019年度6月(4日間)	イギリス・女A(短期留学生)
⑦国際交流団体	2019年度6月(5日間)	スウェーデン・女A(短期留学生)
⑧農業関係企業	2019年度7月(1日)	中国・男A(短期留学生)
⑨英会話教室	2019年度8月(3日間)	インドネシア・女(正規大学院生)
⑩国際交流団体	2019年度11月(4日間)	中国・女C(短期留学生)
⑪リゾート宿泊施設	2019年度11月(4日間)	中国・男B(大学院研究生)

表3の通り、全てのインターン受け入れ企業・団体は三重県内のものであり、インターン留学生たちの就業場所も三重県内である。これらの企業・団体を対象にインターンシップ終了後にアンケートを実施した。アンケートの質問は以下の通りであるが、回答選択肢の内容を含めた全体については文末注に示す。アンケートの1～9の質問のうち、本稿では特にインターン留学生の日本語能力について聞いた質問2、実務能力について聞いた

質問 3、そしてインターン留学生を正規採用する可能性について聞いた質問 5 についてまとめ、報告する。

1. インターンシップに対する全体的なご感想をお聞かせください (回答選択式・その選択肢を選んだ理由を自由記述)
2. インターン学生の日本語能力についてどう思いましたか (回答選択式・その選択肢を選んだ理由を自由記述)
3. インターン学生の実務能力についてどう思いましたか (回答選択式・その選択肢を選んだ理由を自由記述)
4. インターン学生の態度や人間性についてどう思いましたか (回答選択式・その選択肢を選んだ理由を自由記述)
5. このインターン学生が貴社に就職すると仮定したら、やっていけると思えますか (日本語能力、実務能力、就業態度などを鑑みて)。 (回答選択式・一部自由記述)
6. インターン学生が特に苦勞していることはありましたか (複数回答可) (回答選択式)
7. 今後もしインターン学生を受け入れることになった場合、就業前に大学で教えておいてほしいこと、注意しておいて欲しいことがありましたらお書きください (自由記述)
8. 今後もしインターン学生を受け入れることになった場合、手続きのやり方等を含め、大学に対するご要望がありましたらなんでもお書きください (自由記述)
9. 今後も学生のインターンシップを受け入れてくださいますか (回答選択式)

また、表 3 の中で、⑨英会話教室のインターンシップについては、仕事の内容が英語講師補助であったため、インターン留学生の応募資格としては日本語能力が問われず、代わりに英語能力が問われるものであった。結果、このインターンシップに参加した留学生 (インドネシア人・女) の日本語能力は日常会話レベルにも満たないものであった。これについてはインターン留学生の日本語能力を問う質問 2 の結果報告の際に留意されたい。

4. アンケート調査の結果

4.1 質問 2「インターン学生の日本語能力についてどう思いましたか」の結果

この節では、質問 2 の結果を記す。回答者である企業・団体には、この質問に対する回答を選択肢から選んでもらった後、その選択肢を選んだ理由を自由記述形式で書いてもらった。この質問 2 に対する回答を表 4 にまとめる。表の自由記述回答にある (企業・団体) の後の数字①～⑪は、表 3 の受け入れ企業・団体の数字と対応している。

表4から、受け入れ企業・団体の多くがインターン留学生の日本語能力は「a. とても良かった」と回答し、高い評価を与えていることが分かる。この選択肢を選んだ理由としては、業務を問題なく遂行することができたとする回答が最も多かった。また、「b. まあまあ良かった」と回答した受け入れ企業・団体も3社あり、そのうち2社（同じ団体であるが）も「業務に支障はなかった」と回答している。逆にインターン留学生の日本語能力に低い評価を与えた企業・団体は「c. 良くも悪くもなかった」と回答したのが1社、また「d. あまり良くなかった」と回答した企業は1社のみであった。このうちdの回答を与えた企業はインターン留学生の日本語能力を要件としなかった英会話学校であったので、この留学生の日本語能力の低さはインターンとして問題にはならなかったと考えられる。

表4 アンケート結果（質問2「インターン学生の日本語能力についてどう思いましたか」）

回答選択肢	回答数（計11）および自由記述回答（左の選択肢を選んだ理由）
a. とても良かった	<p>回答数6（54.5%）</p> <p>●自由記述回答：</p> <p>（①国際交流団体）体験した業務を問題なく遂行することができたため</p> <p>（④リゾート宿泊施設）日本語はもちろんですが、敬語での対応も十分でした</p> <p>（⑤観光施設）A君は日本人同士の会話にも入り話すなど、深く日本語を理解できているようでした。B君は想像力が豊かで、言葉は少なかったけれど相手の気持ちを察するとか先々を読んで計画的に行動するとかが出来て、積極的に学ぼうとする姿が見えました。</p> <p>（⑦国際交流団体）日常会話には問題がなかった。本人が翻訳業務を希望していたため、同業務を体験してもらったが、分からない用語は自分で調べる等して、業務を遂行していた。</p> <p>（⑧農業関係企業）自分（インターン学生対応従業員）も外国人だけど、ずっと日本語で会話をしました。弊社の他の社員との会話が、とてもスムーズでした。</p> <p>（⑩国際交流団体）日常会話には問題がなかった。本人が翻訳業務を希望していたため、同業務を体験してもらったが、分からない用語は自分で調べる等して、業務を遂行していた。発話をもう少し大きな声ですると、なお良いと思われる。</p>
b. まあまあ良かった	<p>回答数3（27.3%）</p> <p>●自由記述回答：</p> <p>（②日韓交流団体）業務に支障はありませんでした</p> <p>（③日韓交流団体）業務に支障はありません</p> <p>（⑥リゾート宿泊施設）普段の会話は問題ありませんし、とにかくコミュニケーションが取りやすいので、困ったことはありませんでした。子供のお客さんや、方言などを理解するのが難しいようでしたが、これからどんどん日本語も上達すると思います。</p>

c. 良くも悪くも なかった	回答数 1 (9.1%) ● 自由記述回答： (⑪リゾート宿泊施設) 日本語レベルはスピーキング、リスニングともに、 総じて高くはありませんでした。
d. あまり良くな かった	回答数 1 (9.1%) ● 自由記述回答： (⑨英会話教室) 基本的な対応等は英語で行ったため、あまり日本語を使 うまたは聞く機会はなかったが、日本語は単語レベルであると推測される。
e. 全然良くなかった	回答数 0
f. その他	回答数 0

4.2 質問3「インターン学生の実務能力についてどう思いましたか」の結果

この節では、質問3の結果を記す。質問2と同様、回答者である企業・団体には、この質問に対する回答を選択肢から選んでもらった後、その選択肢を選んだ理由を自由記述形式で書いてもらった。この質問3に対して筆者らが与えた選択肢と自由記述欄に述べられた回答を含め、企業・団体からの回答を表5にまとめる。

表5 アンケート結果 (質問3「インターン学生の実務能力についてどう思いましたか」)

回答選択肢	回答数 (計 11) および自由記述回答 (左の選択肢を選んだ理由)
a. とても良かった	回答数 7 (63.6%) ● 自由記述回答： (①国際交流団体) 職員からの説明や業務に関する指示を十分理解し、決められた時間の中で正確に業務を行うことができたため (④リゾート宿泊施設) 与えられた仕事を丁寧にこなし、お客様に対しても笑顔で接客をしていました。 (⑤観光施設) 通訳、接客、ガイドブック・パンフの翻訳など全てをうまくこなして、従業員たちとのコミュニケーションも取れていた。休みの日は観光施設を回ったが、SNSで友人に紹介するなどインフルエンサーの役割も自覚していた。 (⑦国際交流団体) どの業務も、効率的に問題なく遂行していたように思う。複数の業務を依頼されているとき、優先順位を決める(確認する)とさらに良いと思われる。 (⑥リゾート宿泊施設) 仕事も率先してやってくれ、言ったこともきちっと真面目にやってくれました。コミュニケーションを取るのが好きなので、お客さんとも交流できていました。 (⑧農業関係企業) ハウス作業で皆さんと協力して、気を遣ってくれました。初めてだったのに、作業スピードも速かったです。 (⑩国際交流団体) どの業務も、効率的に問題なく遂行していた。

b. まあまあ良かった	<p>回答数 3 (27.3%)</p> <p>● 自由記述回答：</p> <p>(②日韓交流団体) 社会人慣れしていないところが新鮮でした。</p> <p>(③日韓交流団体) 社会人慣れしていないところが新鮮でした。サービス業(販売業務)に慣れていないせいか、お金の精算(お釣りなど)が不安そうでした。後半には、だいぶん慣れてくれました。</p> <p>(⑪リゾート宿泊施設) 良い、悪いを判断できるほどの期間の長さではありませんでした。熱意は伝わりました。</p>
c. 良くも悪くもなかった	<p>回答数 1 (9.1%)</p> <p>● 自由記述回答：</p> <p>(⑨英会話教室) 態度としては非常によく、好感が持てるが、英語を教える教室という立場上、英語の能力が求められる。しかし、英語の能力(スピーキング力、リスニング力)が英語を教えるという立場にはまだ足りていない。しかし、素直に聞き、それを自分のものにしようとする態度がうかがえ、これからに期待が持てると感じた。また、講師でなく、事務を担当するとした場合、書類処理能力の他、コミュニケーション力及び日本語力が求められるが、これをするための日本語能力にはまだ至っていないと推察される。</p>
d. あまり良くなかった	回答数 0
e. 全然良くなかった	回答数 0
f. その他	回答数 0

回答選択肢のうち、「a. とても良かった」と回答した企業・団体は7社、「b. まあまあ良かった」と回答したのは3社であり、前節の質問2の結果と同様、インターン学生の実務能力についても概ね高い評価が与えられている。ただし、「b. まあまあ良かった」と回答した3社からは、「社会人慣れしていない」、「お金の精算が不安そうだった」、「良い悪いを判断できるほどの期間の長さではなかった」という自由記述回答が寄せられた。これらのコメントからは、受け入れ企業・団体がインターン留学生の実務能力を、実際よりもやや高めで好意的に評価しているという可能性が示唆される。また「c. 良くも悪くもなかった」と回答した1社(英会話学校)は、インターン留学生の実務能力の不足を直接的に指摘している。そしてその不足とは、言語能力(英語能力)の不足とそれに伴う実務能力の不足であった。にも関わらず「c. 良くも悪くもなかった」と回答しているという事実も、この企業が実際よりも高めの評価を与えた可能性を示唆する。

4.3 質問5「このインターン学生が貴社に就職すると仮定したら、やっていけると思えますか」の結果

この節では、質問5の結果を記す。この質問では、回答者である企業・団体には、この

質問に対する回答を 3 つの選択肢「a. やっていけると思う」、「b. やっていけないと思う」、「c. 不足する点を改善すれば、やっていけると思う」から選んでもらった後、選択肢 c と回答した場合のみ「このインターン学生が不足している点、改善すべき点をお書きください」という追加の質問を与えた。さらに、「b. やっていけないと思う」と回答した 1 社からは、その理由をコメントとして提供された。なお、受け入れ企業⑨が、b と c の選択肢の両方に丸をしたので、回答数は 12 となった。結果を表 6 にまとめる。

表 6 が示すとおり、先に述べた質問 2、3 とは違い、この質問 5 の回答としては「c. 不足する点を改善すればやっていけると思う」という回答が 7 社と最も多く、学生の能力の不足を指摘する声が多く寄せられるという結果になった。質問 2、3 でインターン留学生の日本語能力と実務能力に高評価を与えた企業・団体も、では自社で採用するかと言われればそうともいえないというのが実際の評価であると推察される。選択肢 c を選んだこれらの企業・団体が、インターン留学生の不足する点として挙げたものの中で最も多かったのは、日本語能力の不足であった (⑨の英会話教室は英語能力の不足を挙げた)。そしてその全ての回答が、日本語能力が業務を遂行するのに十分ではないことを指摘している。

一方、「a. やっていけると思う」と回答した企業・団体も 4 社あり、さらにそのうち 3 社がリゾート宿泊施設あるいは観光施設であったことは、こうした業界が外国人留学生の受け入れに前向きであり、また外国人留学生にとっては就職しやすい業界であるという可能性を示唆している。

表 6 アンケート結果

(質問 5「このインターン学生が貴社に就職すると仮定したら、やっていけると思いませんか」)

回答選択肢	回答数 (計 12)
a. やっていけると思う	回答数 4 (30.0%) (④リゾート宿泊施設)、(⑤観光施設)、(⑥リゾート宿泊施設)、(⑧農業関係企業)
b. やっていけないと思う	回答数 1 (8.3%) (⑨英会話教室) ●コメント 現状では、外国人講師 (英語ネイティブスピーカー) と日本人講師の採用にとどまっていることにある。インドネシア出身であるということで、外国人ではあるが、ネイティブスピーカーではなく、また日本人講師の立場で指導をすることになるのであれば、日本語の能力に加え、日本の英語教育等にも精通していることが求められるだろう。また、事務職であれば必然的に日本語が求められる。こういった点から、単に英語講師という点から考えれば、これからの努力によりなし得ることはできるだろう。しかし、

	<p>外国人講師としてあるいは、事務職または日本人講師の立場での講師職として就職することは、ここでは難しいだろう。</p>
<p>c. 不足する点を改善すれば、やっつけていけると思う</p>	<p>回答数 7 (58.3%)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 追加質問「このインターン学生が不足している点、改善すべき点をお書きください」に対する回答（自由記述） (①国際交流団体) インターンの体験に関するレポートを記入するのに少し苦勞をしているようだった。提出してもらったレポートを拝見すると、業務を遂行する上でも、翻訳業務を行う上でも、もう少し日本語能力を高めてもらう必要があるかと思われる。 (②日韓交流団体) 言葉が通じれば大丈夫です。 (③日韓交流団体) 言葉が通じれば大丈夫です。 (⑦国際交流団体) 当財団では、職員が翻訳をする機会はほとんどないので、実際には彼女の期待にはそえられないと思う。また事業の企画等、当財団の業務を行うためには、日本語能力をさらに上げる必要があると考える。 (⑨英会話教室) 「英語講師」として英語を教える立場を考えた場合、圧倒的に英語力が不足している点があげられる。日本人講師であっても、英検や TOEIC などでの高得点取得及び、英会話力、指導力を求められる。指導力については、研修を通して指導法について学ぶことができるが、会話力及び英語力については、指導する立場にふさわしい力を兼ね備えていることが必須である。実際の英語力については、インターンシップの期間だけでは言及することはできないが、発音、文章理解力などから鑑みて、さらなる改善が必要であるように思う。 (⑩国際交流団体) 事業の企画等、当財団の業務を行うためには、日本語能力をさらに上げる必要があると考える。 (⑪リゾート宿泊施設) 日本語レベルがあがり、もう少しコミュニケーションや仕事ぶりをみでの判断となります。

5. 考察

本稿では、第 2、3 章において、外国人留学生の日本での就職の壁となるものには①日本独特の就職活動の形態、②日本語能力の不足とこれに伴う実務能力の不足、③日本的な「和」の文化に適応する必要性の 3 つがあること、そして本調査の焦点が②日本語能力の不足とこれに伴う実務能力の不足にあることを述べた。そしてアンケート調査の結果を見ると、外国人留学生をインターンとして受け入れた企業・団体の回答から、この②日本語能力の不足とこれに伴う実務能力の不足が如実に示されることとなった。つまり、インターン留学生の日本語能力及び実務能力に対し高評価を与えていても（質問 2、3）、それはあくまでもインターンとしての能力に対する評価であり、実際に正社員として採用するには留学生の能力が足りないと回答する企業が多く（質問 5）、そしてその能力の不足とはつまり日本語能力の不足とこれに伴う実務遂行能力の不足であった。

こうした留学生の実務をするに足る日本語能力の獲得に関しては、現状大学で行われているキャリア教育科目では対応しきれていないことは第 2 章で述べた通りである (恒松 2011、2014)。この課題を大学の教育内容の再考によって解決できるかという問いに対しては、様々な考え方があろう。まず、大学とはそもそも教育機関であり、職業訓練機関ではないので、実務能力は就職後に企業・団体が育成すべきものであるという考え方がある。元来日本の企業慣習として、企業は新入社員の就職後に幅広い職務能力を教育・開発する傾向があり (花田 2011、小見山 2007)、外国人留学生の採用においても専門知識は入社後に育成すると考えている企業が多い (山本・糸川・渋谷・副島・戸坂・星野 2008)。また大学側も、既存のキャリア教育課程では対応しきれない面を埋めることを目的としてインターンシップを導入したという背景がある (長尾 2012)。

一方、留学生を対象としては、日本語教育とキャリア教育を両立させることが可能であるとも考えられる。留学生を対象とした日本語教育科目においては、特に上級レベルの科目では初中級のように学習項目 (文型・文法) を決まった順序で一律に積み上げる必要がなく (高屋敷 2012)、ニュースや新聞記事などの生教材の使用、または日本人学生との交流活動が実施されることも多い。ならば就職活動の過程で必要となる様々なものが日本語教育科目の教材となりうる。例えばテレビのニュースなどの代わりに企業説明会を視覚・聴覚教材として用い、新聞記事の代わりに企業の募集要項や SPI 試験を読解の教材として用い、模擬面接を会話の演習として実施し、インターンシップをビジネス日本語演習の場とすることなどが考えられる。ただし留学生の日本語教育にこうした就職における活動を取り入れる場合、教師が就職活動に精通している必要がある。多くの場合、学生時代から社会人の時期に至るまでアカデミックな世界で生きてきた大学教員は、いわゆる一般的な就職活動からは縁遠い人材が多いと思われるので、理想的には企業への就職活動経験、業務経験を有し、さらに日本語教育を行うに足る要件を満たした教員の採用が望まれることとなる。

6. 結語

本稿は、一般的に外国人留学生が日本で就職する際に困難となる日本語能力と実務能力について、外国人留学生をインターンとして受け入れた企業・団体がどのように評価しているのかを、企業・団体を対象としたアンケート結果から考察した。その結果、アンケート調査に参加した企業・団体からも、受け入れたインターン留学生の日本語能力と実務能力は、そのまま採用するには足りないという声が多く聞かれた。これに対し、第 5 章の考察では、留学生を対象とした日本語教育科目に就職活動の過程で直面する場面を教育に取

り入れる可能性を示した。

大学におけるキャリア教育のあり方については、1990年代後半以来常に大学が試行錯誤するところである（谷田川 2012, 花田 2011）。一方、第1章に述べたように、日本という国が外国人材の活用を進めるならば、大学による外国人留学生に対するキャリア教育の是非、そのあり方についても、多くの議論がなされるべきであると考えられる。そして外国人留学生に対するキャリア教育を是とするならば、留学生が日本で就職するにあたって最も困難となるものが実務を遂行するに足る日本語能力であるのだとすれば、これに足る日本語能力の育成方法が深く検討されるべきであることを主張し、本稿の結語とする。

注

インターン留学生受け入れ企業・団体を対象としたアンケートの全文は以下の通り。

1. インターンシップに対する全体的な感想をお聞かせください。
 - a. とても良かった
 - b. まあまあ良かった
 - c. 良くも悪くもなかった
 - d. あまり良くなかった
 - e. 全然良くなかった
 - f. その他 ()→どうしてそう思いましたか。
2. インターン学生の日本語能力についてどう思いましたか。
 - a. とても良かった
 - b. まあまあ良かった
 - c. 良くも悪くもなかった
 - d. あまり良くなかった
 - e. 全然良くなかった
 - f. その他 ()→どうしてそう思いましたか。
3. インターン学生の実務能力についてどう思いましたか。
 - a. とても良かった
 - b. まあまあ良かった
 - c. 良くも悪くもなかった
 - d. あまり良くなかった
 - e. 全然良くなかった
 - f. その他 ()→どうしてそう思いましたか。
4. インターン学生の態度や人間性についてどう思いましたか。
 - a. とても良かった
 - b. まあまあ良かった
 - c. 良くも悪くもなかった
 - d. あまり良くなかった
 - e. 全然良くなかった
 - f. その他 ()→どうしてそう思いましたか。
5. このインターン学生が貴社に就職すると仮定したら、やっていけると思いますか（日本語能力、実務能力、就業態度などに鑑みて）。
 - a. やっていけると思う
 - b. やっていけないと思う
 - c. 不足する点を改善すれば、やっていけると思う →このインターン学生が不足している点、改善すべき点をお書きください。
6. インターン学生が特に苦勞していることはありましたか。（複数回答可）
 - a. 仕事がつまらなさそうだった
 - b. 仕事が忙しく、大変そうだった

－考察（英語コースに所属する外国人留学生のライフストーリー分析から）』『グローバル人材育成教育研究』5, pp.13-23.

- (13) 長尾博暢（2012）「インターンシップと大学組織」吉本圭一編『インターンシップと体系的なキャリア教育・職業教育 高等教育研究叢書 117』広島大学高等教育開発センター, pp.45-62.
- (14) 日本学生支援機構（JASSO）（2010）『平成 21 年度私費外国人留学生生活実態調査』https://www.jasso.go.jp/about/statistics/ryuj_chosa/_icsFiles/afieldfile/2015/10/13/ryujchosa21p00.pdf
- (15) 日本学生支援機構（JASSO）（2012）『平成 23 年度私費外国人留学生生活実態調査』https://www.jasso.go.jp/about/statistics/ryuj_chosa/_icsFiles/afieldfile/2015/10/13/ryujchosa23p00.pdf
- (16) 日本学生支援機構（JASSO）（2014）『平成 25 年度私費外国人留学生生活実態調査』https://www.jasso.go.jp/about/statistics/ryuj_chosa/_icsFiles/afieldfile/2015/10/13/ryujchosa25p00.pdf
- (17) 日本学生支援機構（JASSO）（2016）『平成 27 年度私費外国人留学生生活実態調査』https://www.jasso.go.jp/about/statistics/ryuj_chosa/_icsFiles/afieldfile/2016/12/02/ryujchosa27p00.pdf
- (18) 日本学生支援機構（JASSO）（2019）『平成 29 年度私費外国人留学生生活実態調査』https://www.jasso.go.jp/about/statistics/ryuj_chosa/_icsFiles/afieldfile/2019/04/04/ryujchosa29p00_4.pdf
- (19) 花田光世・宮地夕紀子・森谷一経・小山健太（2011）「高等教育機関におけるキャリア教育の諸問題」、『KEIO SFC JOURNAL』11, pp.73-85.
- (20) 平田実（2011）「外国人留学生の日本企業就職志向に関する価値意識の分析」『研究・技術計画学会 年次学術大会講演要旨集』26, pp.260-263.
- (21) 福岡昌子・趙康英（2013）「グローバル人材育成と企業の留学生雇用に関する研究」『三重大学国際交流センター紀要』8, 19-38.
- (22) 向山陽子・村野節子・山辺真理子（2019）「学部留学生向けビジネス日本語教育用教材の開発」『BJ ジャーナル』2, pp.2-15.
- (23) 守屋貴司（2012）「日本企業の留学生などの外国人採用への一考察」『日本労働研究雑誌』54, pp.29-36.
- (24) 文部科学省（2019）『外国人留学生の就職促進について（留学生の採用・定着における現状・課題）』https://www.meti.go.jp/shingikai/economy/ryugakusei_katsuyaku_pt/pdf/001_04_00.pdf
- (25) 柳基憲（2017）「ICT を活用した外国人材の活躍支援と地方創生に向けた取り組み－CIP（Creative Interchange Platform）の活用事例からの考察」『都市政策研究』18, pp.97-112.
- (26) 山本富美子・糸川優・渋谷倫子・副島健治・戸坂弥寿美・星野智子（2008）「企業が期待する外国人「人財」の能力とビジネス日本語」『専門日本語教育研究』10, pp.47-52.
- (27) 楊曉鐘・曹珺紅（2005）「「曖昧」な日本語を再認識：日本語教育の立場から」『福井大学教育地域科学部紀要 第 I 部 人文科学（国語学・国文学・中国学編）』56, pp.43-49.

コロナ禍における国際教育の重要性と課題 ～「Online で世界と繋がる国際交流 days 2020」の実践から～

栗田 聡子

The Importance and Challenges of International Education under COVID-19 From the Practice of “International Exchange Days 2020, Connecting with the World through Online”

KURITA Satoko

〈Abstract〉

The COVID-19 outbreak has prompted major changes in educational institutions around the world. This paper begins by explaining the importance of international and SDGs education in the VUCA era, and then discusses how its importance has been increased by the corona shock. The CIER (Center for International Education and Research) of Mie University, “an environmentally advanced university,” was aware of the importance of these issues. Therefore the center has organized many events by making the most of the online media technology to promote international and SDGs education. After introducing the major events organized by the center in FY 2020, the paper discusses the indispensability of international education in the post-Corona and “beyond 5 G” generation as well as the challenges of “measuring internationalization of universities”.

キーワード：新型コロナウイルス、国際教育、留学、VUCA、SDGs、大学の国際化

1. はじめに

2019年12月、中国の武漢市で初めて確認された新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は世界のあり方を一変させた。感染拡大は未だ終息の兆しを見えず、社会経済や文化に甚大な打撃を与え、それは教育にも及んでいる。キャンパスでの授業や課外活動等による交流とコミュニケーションは教育機関の責務であるにもかかわらず、コロナは学生からその機会を奪っている。本稿では、まずコロナ・ショックがもたらした変革とこの時代における国際教育の重要性を考え、SDGs教育との親和性について述べる。そして、環境先進大学をかかげる三重大学の国際交流センターがコロナ禍で企画・開催してきたオンライン・イベントの概要と結果を報告し、コロナ後の国際教育における課題や展望について考察する場とする。

2. 新型コロナに対する大学の対応

新型コロナウイルス感染症 (以下、コロナと表記) は、12 月 29 日現在で世界の感染者が 8,100 万人、死者は 176 万人を超えた (NHK WEB, 2020)。最も感染者が多い国はアメリカ合衆国で約 1,916 万人 (死者数: 約 33 万人)、日本は比較的少ないとはいえ約 23 万人 (死者数約 3,400 人) にもものぼった。

未曾有のコロナ・ショックを経て、with コロナでの日常が定着しつつある中、大学を含める教育現場は変容を迫られてきた。大学はコロナ対策のため、従来の対面授業を再開するのは難しく、他国と比較して活用が遅れていたオンライン教育の重要性が飛躍的に高まり、いわば強制的にオンライン授業へ移行した。2020 年 5 月の時点で、国立大学 86 校の約 9 割が全面的に遠隔授業を実施し、後期からは対面とオンラインを組み合わせた「ハイブリッド型」の授業を実施する大学が 9 割を占めた (文科省, 2020)。

本学も、他大学と同様に、この「Zoom 元年」とも呼ばれる教育の転換期を試行錯誤しながら乗り越えることとなった。5 月から開始されたオンラインやオンデマンドを基本とせざるを得ない授業は、一部の少人数授業や実験科目を除いて現在も継続されている。

3. VUCA 時代におけるコロナ禍

このように、強いられる形で開始されたオンライン授業には、当然のことながら様々な課題が浮上している。しかし、内閣府は教育における IT 化も含め、この意識や行動の変化を「社会変革の契機」としてポジティブに受け止める姿勢を見せた。さらに、コロナ・ショックの経験と反省も踏まえて、「危機に強く、変化に対応し創造力のある人材を育むための教育改革にスピード感を持って取り組む必要がある」とも断言している (内閣府 2020, p 12)。

コロナ・ショックは、「VUCA」の時代における象徴とも捉えられるだろう。VUCA は、1990 年代後半にアメリカ陸軍戦略大学で紹介されていた概念であり (Stiehm, 2002)、2010 年代になってビジネスの業界で使用されるようになったアクロニムである。「Volatility (変動)」「Uncertainty (不確実性)」「Complexity (複雑性)」「Ambiguity (不透明性)」を意味し、総合的に「先行きが不透明で、将来の予測が困難な状態」を指す (村尾, 2021)。

コロナ以前から、様々な国の政治の先行きは不透明であり、社会が分断され、資本主義というスタンダードな価値観さえも否定されようとしている。メディア技術の進化により SNS は先鋭的な主張が瞬時に世界中の人々に伝播することを可能にし、人工知能 (AI) の発展は、社会やビジネスをさらに複雑にした。さらに地球温暖化に伴う気候変動や異常気象、地震や台風、森林火災のような災害など、予測困難な事象が次々と起こっている。

このように先行き不透明な時代に突入した中、突如発生したのが新型コロナウイルスであった（堀、2017）。

コロナ禍があぶり出したのは、マスクやワクチンをめぐる自国優先主義や経済格差、Black Lives Matter 運動を引き起こした人種差別等の問題であった。言葉を換えて言えば、「人類の身勝手さと現代社会の構造のもろさ」（朝日新聞、2021）が露呈したとも言える。

その事象の1つを紹介しているのが、米国のレストラン経営者で自然災害の影響を受けた人々に食事を提供することを専門とする非営利団体、World Central Kitchen の創設者であるホセ・アンドレ氏が昨年4月、ツイッターに投稿した写真と文である（写真1）。写真の1枚は、コロナ禍で買い手がつかず、アイダホ州で捨てられた山積みのジャガイモ。もう1枚は、テキサス州のフードバンクに並ぶ車の大行列。同じ米国で、食料があり余っている一方で、食べ物に困る人たちが行列を作る矛盾。技術が進歩した豊かな時代に、この2枚の写真がなぜ同時に存在するのだろうか。アンドレ氏はTwitterで断言している。“food is not the problem but the solution”（食物が問題なのではなく、解決方法が問題なのである）。前述の「危機に強く、変化に対応し創造力のある人材を育むための教育改革」とは、まさにこのような未曾有の事態に対して、速やかに課題を解決できるような人材を育成できるような教育のこともあるのであろう。



写真1. ホセ・アンドレ氏のツイッター投稿

4. コロナ・ショックと国際教育の親和性

人は、一般的にコンフォート・ゾーンと呼ばれる「居心地のいい快適空間」「自分の当たり前前の世界」に自分を置き、「自分のやり方が一番良い・正しい」と信じ、全ての物事を自分達の基準で判断・評価する特徴があると考えられている（荒木、2015）。認知的に、新しい情報は、既知の情報ネットワークとの関連でしか認識・理解できないのであるが、これは、他の文化を否定的に判断したり、低く評価したりする態度や思想である自文化中心主義（Ethnocentrism）にも通じる特徴である。そしてその能力の限界は、生まれ育った社会に「適合」していくうえで、ある意味必要な条件であるとも考えられる。

逆に、異文化は自分の当たり前が当たり前でない世界の経験であり、コンフォート・ゾーンの外であるラーニング・ゾーンやパニック・ゾーンと呼ばれる世界に自分を置く経験を与える。異文化コミュニケーションや留学生と学ぶ国際共修授業を推進する国際教育は、コロナ・ショック以前から学生が自文化中心主義を乗り越え、「異なる価値観の間でどのように折り合いをつけられるか?」「異なる文化を背景に持つグループと協力しながら課題に取り組み、クリエイティブな発想や価値を創造し、そのプランを実現するには?」という問いに向かわせてきた(堀江, 2020)。地球温暖化による気候変動がもたらす世界規模での貧困格差等の社会問題は、自文化中心主義に引張られず、国を超えてのパートナーシップを可能にする、「私ごと」として捉えることのできる想像力と思いやりを必要としている(堀江, 2020)のである。この意味で、国際教育がゴールとして目指してきた能力や考え方は、柔軟性や適応力、創造力そして未知への耐性という人間力となり、VUCA時代のコロナ・パニックのような急激な社会変化を乗り越えるために、極めて重要であることがわかる。多様な価値観を持つ人々と協働して課題を解決していく能力を培う国際教育は、コロナ後の時代を生きるすべての学生にとって不可欠な学びであると言えよう。

5. 「先進環境大学」としての三重大学における国際教育

上記で述べたように、グローバル人材を育成する目的は、自文化中心主義的観点からの世界的競争力から、地球規模の問題解決に立ち向かうためのパートナーシップ(SDGs 目標 17)という方向へ重点が移動している。よって、教育機関、とりわけグローバル人材育成(国際教育)を担う教育関係者はSDGs(持続可能な開発目標)教育の必要性を理解し、率先して推進していく責任があるだろう。この意味で、国際教育とSDGs教育は極めて親和性が高いと言える(栗田, 2020)。

特に、「地域貢献型大学」とすると同時に「先進環境大学」を目指す三重大学は、2019年1月には国連と世界の高等教育機関とのネットワークである国連アカデミック・インパクト(UN Academic Impact: UNAI)に加盟し、4月には「THE 大学インパクトランキング 2019」のSDG 12(つくる責任つかう責任)において、日本国内で1位、世界で31位にランクインした。2020年は、SDG 4(質の高い教育をみんなに)において、日本国内で1位タイにランクインしている(三重大学, 2020)。

このように、三重大学が取り組んできた国際教育は、コロナ以前よりSDGsの線上にあった。昨年は、このSDGs教育を推進する目的から本学新制70周年記念行事として中部国際空港と県庁との産学連携事業である「未来を創るのは私たちだ。」と題した講演会を開催した。招聘したのは、2015年より「持続可能な開発のための教育(ESD)円卓会議」

の委員も務められている辰野まどか氏（グローバル教育推進プロジェクト（GiFT）社団法人代表理事）であった。GiFT が実施しているグローバル教育は、「グローバル・シチズンシップ（地球志民）」育成を掲げている。辰野氏の、学生に話しかけるようなコーチング形式での講演は、ふだんは世界がかかえる課題や海外での出来事についてほとんど興味を持たない学生層の意識や自己効力感を高めた点で、極めて効果的なアプローチであった（栗田，2020）。

6. コロナ禍の国際教育：本学のとりくみ

オンラインでの授業は、対面でなければ効果が上がらない実験や作業を有する内容ではマイナス面が多く、コミュニケーションの面でも不完全なことから課題が多い。しかしながら、その一方で、オンラインという時空を超えたヴァーチャル空間は、国際教育の授業やイベントにとって利点も多い。なぜなら、海外に在住している人々との交流が机上で、それもリアルタイムで実現するからである。海外から招聘する費用も時間もカットできる点は、コロナ前では実施が困難であった事業の実現性を飛躍的に高めた。

「先進環境大学」としての国際教育を目指す本学の国際交流センターは、オンラインという環境の強みを生かし、留学生説明会や交流会だけでなく、SDGs を推進する数々のイベントを企画・実施してきた。毎年11月から1月、数々のイベントを開催してきた「国際交流 days」は、本年度は「世界とつながる国際交流 days 2020」と題し、10以上のイベントを企画した。表1. は、2020年度にセンター主催で実施した国際教育関連の主なイベントと、これから年度末に実施予定のイベント・リストである。

6.1. SISA（Students who are Interested in Studying Abroad）登録の募集

国際交流センターは、コロナ禍で学生への連絡方法やイベントがオンラインに限定されることを考慮し、コロナ以前から計画していたSISAの募集を新学期とほぼ同時に開始した。主な目的は、「留学奨励のための海外留学情報や国際交流関連情報の周知」である。基本的に、留学に関連する情報や国際教育イベントは、UNIPA（Universal Passport）のメールシステムを用いて全学に周知をしているのだが、日々大量の情報をUNIPAも含めて受信する学生の大半は、メールのタイトルも読まないことが多いと聞く。そこで、①コロナ禍でさらに増加している大学からの連絡メールに紛れて留学情報を見逃さないように、②留学や国際交流等に興味を持つ学生のみに送信すべき内容のメールを送ることができるように、SISA登録を募集した。結果、1回の募集で182名からの登録申請があり、登録時のアンケート結果から、以下のような特徴が参加者にあることがわかった。

表 1. 2020 年度 三重大学国際交流センター主催の主なイベント (オンライン)

開催日時	イベント	主な登壇者	参加者	主な目的	海外からの参加
7/29 ランチタイム	留学説明会①	留学経験者 2 名 スペイン・ジャウメプリメル大学 国立高雄師範大学	30 名 (本学学生)	留学促進	
7/30 ランチタイム	ドイツ day (交流会と 留学説明)	ドイツ人留学生 8 名 留学経験者 (工学部院生) ハイデルベルク大学	27 名 (本学学生)	留学促進 国際交流	
11/13 ランチタイム	留学説明会② 英語圏	留学経験者 (人文学部生) タスマニア大学	40 名 (本学学生)	留学促進	タスマニア (オーストラリア)
11/20 ランチタイム	Lunch Time New York①	NY 国連フォーラム幹事 (津市出身)	39 名 (本学学生・ 教職員)	国際教育 SDGs 教育	N Y (米国)
11/26 13:00-14:30	タスマニア大学 生との交流会①	タスマニア大学生 7 名	20 名 (本学学生)	国際交流	N Y (米国)
12/3 16:30-18:00	国連 75 周年 記念 in 三重 大学	国連広報センター所長	201 名 (本学学生・ 教職員・一般)	国際教育 SDGs 教育	ドイツ・ N Y (米国)
12/8 ランチタイム	Lunch Time New York②	NY 国連フォーラム幹事 (津市出身)	36 名 (本学学生・ 教職員)	国際教育 SDGs 教育	N Y (米国)
12/10 ランチタイム	留学説明会③ (台湾・韓国編)	留学経験者 2 名 梨花女子大学 (韓国) 国立高雄大学 (台湾)	約 30 名 (本学学生)	留学促進	
12/14 ランチタイム	トビタテ! 第 14 期募集説 明会	留学経験者 2 名 ノースフロリダ大学 (米国) テキサス大学 (米国)	27 名 (本学学生)	留学促進	
12/15 ランチタイム	Lunch Time New York③	NY 国連フォーラム幹事	22 名 (本学学生・ 教職員)	国際教育 留学促進	N Y (米国)
1/22 18:00-19:00	タスマニア大学 生との交流会②	タスマニア大学生 9 名	本学学生 (人数未定)	国際交流	タスマニア (オーストラリア)
2021/1/27 ランチタイム	韓国メディア と文化	インディアナ大学講師	本学学生・ 教職員 (人数未定)	国際教育	ソウル (韓国)

- 1年生の登録が多く（図1. 参照）、人文学部が最多。全体的には、女子が6割。
- 登録理由として最多は「海外留学への興味」であるが、「留学生との交流」希望者も多い。交流を希望する割合は、学年が上がるほど増加している。（図2. 参照）
- 最も人気の留学プログラムは「三重大主催」で「短期の語学留学」
- 留学先の希望は、順に「北米」「ヨーロッパ」「オセアニア」（約8割）
- 海外留学で不安な要因として、トップは「留学費用」であり、ついで「言語能力」
- 留学生との交流に対して、9割の学生が「(大変) 興味がある」ことが判明。交流したい留学生の出身は特に「北米」「ヨーロッパ」が多い。

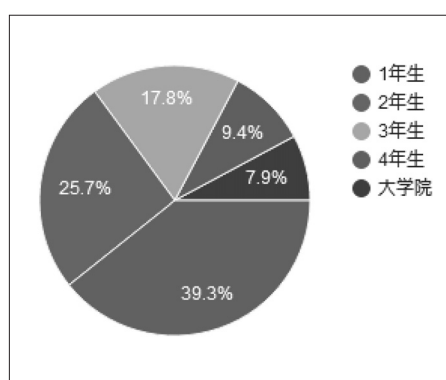


図1. SISA に登録した学生の内訳 (学年)

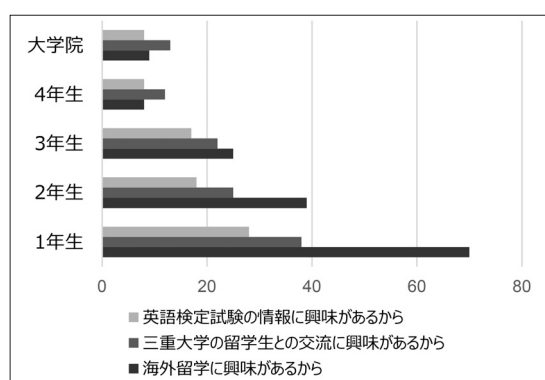


図2. SISA に登録した理由 (学年別)

6.2. 留学推進イベント (計4回)

コロナ禍で、他大学と同様に今年度の留学は短期・中長期（交換）留学共にすべて中止となった。2017年以來、国際交流センター主催の夏期語学短期プログラムとして恒例となっていたカナダの名門ブリティッシュ・コロンビア大学英語プログラムだけでなく、今年度の春期に向けて企画、はじめて実施する予定であったポートランド州立大学英語学校でのSDGsプログラム、そしてNYマンハッタンで英語を学びながらインターンシップを経験するプログラムも残念ながら中止となってしまった。

大学入学以前から「学生時代に留学したい」と考えている学生は多い。留学に興味や憧れを抱いてSISAに登録している学生ら（特に1年生）の興味とモチベーションを維持するためにも、草の根活動としてのオンライン留学説明会を実施していく必要性があった。

例年4月に実施していた留学オリエンテーションのかわりに、先の見通しが不透明なまま現状報告も兼ねて7月に第1回目の留学説明会を開催。「トビタテ！」募集の説明会を含め、計4回の留学説明会とドイツ留学の紹介（7/30のドイツdayにて）を学生が参加しやす

いランチタイムに開催した。

それぞれの説明会では、担当者からのオンライン短期留学や交換留学の紹介や事務手続きの説明と共に、交換留学を経験した在学生在が留学体験を報告。留学先は、台湾やスペイン、ドイツやオーストラリア、アメリカ等、多岐にわたっており、それぞれが留学費用から日常のスケジュール、授業のサバイバルの仕方、休日の過ごし方まで、沢山の魅力的な写真を紹介しながら報告してくれた。対面で実施した場合と同じく、留学帰国者からの体験談は、参加学生の満足度を向上させ、留学への興味を強めてくれる鍵である。留学先は異なっても、留学を実現し、様々な弊害を自ら乗り越えてきた先輩からのメッセージは、説得力と重みがある。留学を経験した彼(女)らに共通しているのは、「文化や価値観の違いを尊重し、受け入れることの楽しさ」であり、「いかに自分が世界、ひいては日本について無知であったか」という気づきであるようだ。

以下は、ハイデルベルク大学(ドイツ)に半年間留学した工学部院生の言葉である。「留学という経験を通して得られた自分の価値観や交友関係、苦難、感動というものは留学した人じゃないと得られません。(中略)今皆さんがいるのは三重大学であり、留学に対して少しでも行動すればたくさん回答を出してくれる人が自分の周りにはたくさんいることを忘れないでください。私はその人たちに背中を押され、助けられ、念願だった留学をかなえることができました。その方々に深く感謝するとともに、より多くの方が三重大のすばらしさに気づき、世界に目を向けることができる場であることを知ってほしいです。」

第 2 回目の留学説明会(英語圏)では、オーストラリアのタスマニア大学に留学している学部生から、オンライン経由で留学の報告をしてもらうことが出来た。留学途中でオンライン授業になってしまった彼女だが、十分に留学生生活を満喫できたとのこと。Q&Aでは、「いつから留学の準備をしましたか?」「すべて英語での授業は大丈夫ですか?」等の、参加者からの質問にも次々に返答。日本とタスマニアは時差が 2 時間だけであることで、国際交流イベントも時差が激しい欧米の大学と比較して企画しやすいという利点もあった。

2021 年度「トビタテ!」募集の説明会は、司会も同事業の奨学金で過去に米国の大学院に留学した大学院生 2 名が務め、工学部の学部生を中心に多くの参加があった。司会進行をすべて学生に任せることで話しやすい雰囲気になったこともあり、Q&A では予定時間を超えて質疑応答が活発に続いた。

6.3. 国際交流イベント(計 3 回)

コロナ前に前述の SISA と名付けたメーリングリストを作成した際、登録希望の理由として予想以上に多かったのが「三重大学の留学生との交流に興味があるから」であり、学

年が上がるほどその傾向が高いことがわかった。また、自身の英語レベルの向上のために、欧米からの留学生と交流することを望む学生も多いことが判明した。

だが、コロナの収束が見込めない中でオンライン授業となり、正規生が留学生と共に学べる国際共修の機会や、交流する機会が失われた。留学生にとっても、日本に留学しながら対面で日本人学生らと交流する機会が失われたことは、本来の留学の目的が半減したことになるであろう。そこで、7月30日に「ドイツ day」と題し、コロナ以前の2019年より留学していたドイツ人留学生7名が帰国する前に、自国の文化や政治、自分の大学（ハイデルベルク大学やライプツィヒ大学等）を紹介し、三重大生と交流するイベントを開催した。留学生らは、恒例のクリスマス・マーケットや、デザインの美しい大学図書館などの写真を見せて、熱心に紹介してくれた。日本人学生からの「コロナ禍で寮に滞在する自粛期間が長かったと思いますが、留学はいかがでしたか？」との問いに、「すごく楽しかったです。海岸で散歩したり、ドイツよりも感染者数が各段に少ない津市にいて、本当にラッキーでした」などと、ドイツ人学生らは流ちょうな日本語で日本人学生らを驚かせた。「皆さんにお会いしたいのですが、どこに行ったら会えますか？」という女子学生の質問に対しては、「コロナなので、皆さんとお会いするのは難しいです」とドイツ人学生。今後、コロナの収束が長引くようであれば、オンラインでの国際交流イベントを定期的に実施する必要があるだろう。

11月には、協定校であるタスマニア大学のJapan Societyに所属する7名の学生とのオンライン交流会を開催、著者の授業である「メディアと日本」（日本人正規生20名）で、まず試験的に実施した。同イベントを実施する目的は、本学学生との交流以外に、タスマニア大学との協定関係を維持することにもあった。協定締結以来、本学から留学派遣する学生はほぼ毎年いる一方で、先方から本学に留学する学生は過去数年ゼロという一方通行の関係が続いている。その不均衡を是正して「公平な協定関係」を目指すためにも、本学への留学をタスマニア大学の学生らにアピールする必要がある。「日本のどこが好きなのか？」「日本で行きたいところは？」等の日本人学生からの質問に、タスマニア大学の学生は英語混じりの日本語で丁寧に答えてくれていた。さらなるタスマニア大学生と三重大生との交流を深めるため、1月22日にはお互いの大学をそれぞれ紹介する時間も設けた交流イベントを予定している。

6.4. 国際教育としてのSDGs推進イベント

前述したとおり、環境先進大学を掲げる本学が促進するSDGs（持続可能な開発目標）に即した国際教育を実現するべく開催したイベントの中から、特に注力した国連75周年

記念の事業と、3 回シリーズで開催した Lunch Time New York のイベントを紹介する。

A. 国連 75 周年記念 in 三重大学「未来を創るのは私たちだ。」

12 月 3 日、国際連合 75 周年の記念と SDGs の推進を目的とし、昨年に引続き「未来を創るのは私たちだ。」の第二弾として、国連広報センターの根本かおる所長を招聘して webinar 講演会を開催した。参加者は、本学の教職員以外に、SDGs に興味を持つ個人や企業を含め、国内外から 200 名を超える大規模なイベントとなった。

はじめに、吉松国際担当副学長より「三重大学とそのゴール」として、本学が取り組んでいる教育プログラムの概要と特色について紹介があり、続いて「SDGs を羅針盤に、世界を転換する～ SDGs を自分事に、あなたもチェンジメーカーに～」のタイトルで、根本所長の講演がスタート。根本所長は、「もし、コロナ以前に、SDGs が進展していたならば、ここまでの打撃にはならなかった。」と語り、「コロナ後の 10 年は、Decade of Action として、元の世界へ戻るオールド・ノーマルでなく、SDGs を羅針盤にして『より良い復興』に向けて加速していく大事な年であり、そのためには若者の力が不可欠である」と、強く語られた。

また、講演会の半ばでは、『企業の環境や社会の課題に対する取り組み方』に対して参加者がどれほど意識しているか、に関してリアルタイムのアンケート調査を実施した。学生の参加者の約 80% が、「就職先を考える際に (やや) 意識する」と回答し、根本所長からは「皆さんの意識は (平均よりも) かなり高いです」とのコメントがあった。

後半では、「根本所長への質問コーナー」を設け、冒頭から国内外から参加している 4 名の質問者に、それぞれ丁寧にお答えいただいた。4 名の構成は以下のとおり。

①中田知沙さん (大学院博士後期課程：生物資源学研究科)

質問：日本における「男女格差の縮小」について (SDGs 目標 5)

②トアベン・シュテグミュラーさん *ドイツのハイデルベルク市から

ハイデルベルク大学日本学科 3 年生：日研生として昨年度本学で 1 年間学んだ

質問：日本の食文化と環境保全の問題について (SDGs 目標 13 & 14)

③中山堯之さん (医学部 6 年生)

地域での臨床実習の現場で様々な事情や意見を持つ患者やご家族等を目の当たりにし、異なる意見をまとめていく困難さを経験。

質問：異なる意見をまとめていく上で、大切にされていることについて (SDGs 目標 17 他)

④古市裕子さん *アメリカの NY 市から

津市出身・会社経営者・国連フォーラム NY 幹事所属：コロナ禍の NY で、BLM や選

拳運動など、世界をより良くするために若手層（Z 世代）が運動しているのを目撃してきた。

質問：私たち大人ができること、次世代に渡していくべきこと、について。

上記 4 名の質問は、それぞれ図 2 のように powerpoint にまとめて Zoom 上で提示された。特に根本所長が時間をかけて回答されたのは、最初の質問「日本が先進国の中で最も低い評価を受けている「男女格差の縮小」を改善するために必要なこととは？」に対してであった。その理由は、アントニオ・グテーレス国連事務総長が 2020 年の優先課題としてジェンダー平等を「気候変動」とともに挙げていたからだけでなく、根本所長の個人的なご経験によることがわかった。根本所長は、『『女性の活躍推進』は、日本にとって極めて重要な課題であるが、その指針を決める場が、ほとんど男性で占められており、当事者がいないというのが問題。私は、三重大学の方々にお聞きしたいのですが、教授レベルでの女性の割合はいくらですか？学部長、理事レベルでは？きちんと取り組んでいますか？』と参加者全員に向かって尋ねられ、国連の現在の役員の半数以上は女性であると話された。「日本の女性はあきらめるのではなく、成果を上げながら、時には怒りをぶつけることが必要であると思います」とご自身のキャリア経験も絡めて回答された。

NY 在住の古市さんからの質問「今、大人ができること、次世代に渡していくべきこと



図 3. 「根本所長へ質問」コーナーでの ZOOM 画面

とは？」に対しては、「#Me too 運動でも、原動力になっているのは、若いエネルギー。そのエネルギーを吸い上げ、上手にポジティブなうねりを作ることが大人世代の責任。そのためには、政府、自治体、大学等が、若者に政策立案、決定の段階で関わってもらう機会を与えることが極めて重要だと思います」と力強く言われた。（その他の回答については国際交流センター HP を参照：<https://www.mie-u.ac.jp/international/news/cate-intl/75-in.html>）

イベント後に実施した参加者のアンケート結果によると、9 割以上の方々が「参加して（大変）良かった」と回答してくれた。以下は、参加者のコメントの一部である。

- 根本先生が仰るように、SDGs は教養教育として、可能ならば大学全学部必須の基礎科目として、開講するのが一番いいと考える。(学部生)
- なかなかお話を聞く機会がない根本さんの話を聞くことができよかったです。(学部生)
- 気候変動をはじめとした様々な問題で若者が割を食っている。ゆえに若者は声をあげるべき(行動すべき)というご提案を伺い、「未来を創るのは私たちだ」とした講演タイトルが腹落ちしました。貴重なご講演をいただきありがとうございます。(三重大学の教職員)
- 素晴らしい講演会でした。私も勉強し、行動します。(日本語教師ボランティア)
- SDGs の講座を定期的で開催なさってください。期待しております。(一般)
- 私は高知県の企業で中間管理職をしておりますが、SDGs に関し自らの一步を踏む出すこともそうですが、今後 17 のゴールを目指す若い世代の受け皿となるべく企業を成長させていく必要性を強く感じました。(会社員)

イベント終了後に、根本所長から、「今回のイベントは、手応えを感じた」とのコメントをいただいた。通常、Webinar 講演会は、講演者と司会のみがビデオで顔出しをし、参加者の表情も見れない中で、講演者は話をすることになる。参加者の大半が学生である場合、講演後に質疑応答の時間が用意されていても、質問する学生は少なく、皆無で終わることもある。それらを考慮して、本イベントでは後半に出演する 4 名の質問者も冒頭からビデオ付きで参加してもらったことで、根本所長には、彼らの反応を表情から読み取りながら話をすすめていただく事ができた。その ZOOM 上での双方向的な表情のやりとりが、イベント全体の雰囲気と進行にポジティブな影響を与え、「投票する」ことの高揚感やリズムの変化も加わって、参加者の高い満足度 zu 貢献したと考えられる。

B. Lunch Time New York (3 回シリーズ)

11 月 20 日 (金)、12 月 9 日 (水)、12 月 16 日 (水) のお昼に 3 回シリーズで開催した。お話をくださったのは、常に世界を牽引する影響力のある街であり、今回のコロナ感染拡大で最も深刻な被害を受けた NY に住む女性経



図 4. 国連 75 周年記念イベント (ポスター)

営者、古市裕子氏（12/3 の国連イベントで質問者として参加）。古市氏は、約 25 年前に国連を目指して渡米し、NY 市立大学大学院（政治経済学科・国際関係論）で修士を取得。ユニセフにポジションを獲得しながらも、911 の騒動で流れてしまい、ジェトロ NY に 17 年勤務されたとのこと。2015 年に国連が SDGs を採択したことをきっかけに起業され、現在は Z 世代（デジタルネイティブ世代）と共に SDGs ビジネスを創生するプロジェクトに取り込まれる一方で、NY 国連フォーラムの幹事も務められている。

オンラインを通じて、マスメディアからは知ることが難しいコロナ禍のアメリカと NY の実情、留学や SDGs について、古市氏は、情熱的に、話題満載で話された。こちらでは Lunch Time でも NY では 22 時からの開始であるが、毎回 1 時間以上延長して参加者からの質問に丁寧に返答して下さった。コロナ禍で留学を実現できず鬱々とした気分の学生や、留学経験のある学生や教職員、SDGs を推進する教職員らと共に、様々な話題で盛り上がった。

不確実性が高い VUCA 時代には、「世界で何を起こっているのか」を知り、日々アンテナを張って様々な情報を集め、好奇心が高く、教養を兼ね備えた人々と議論を重ね、常に自らを向上させる必要がある。でなければ、時代から取り残されるばかりでなく、予期せぬ出来事に直面した時に慌てることになるだろう。Lunch Time New York のようなイベントは、学生が、将来自分の人生の舵取りができるように促す、大切な役割があると考えられる。

以下は、各回のイベントの概要である。

◆ 第 1 回目（11/20）「大統領選とコロナ&Black Lives Matter」

「マンハッタン」と呼ばれる地域、ロックダウンでゴースト・タウン化した地下鉄や街の様、州別の大統領選結果から見える米国、ジョージ・フロイト氏の事件と運動のきっかけとなった Z 世代による SNS の力、等についてお話いただいた。白人至上主義者らが、BLM 運動の被害と見せかけて割った数々の商店の窓ガラスの写真も紹介された。

◆ 第 2 回目（12/9）「SDGs とビジネス・Z 世代：コロナと BLM で劇変するアメリカ社会事情」

米国で多大な影響力を持つ Z 世代が重要視する SDGs、ビジネスに影響を及ぼす彼らの「キャンセル・カルチャー」（不買文化）、日本で大ヒットしている「鬼滅の刃」との共通点等について、興味深いお話をうかがった。

◆ 第 3 回目（12/16）「留学とキャリア&NY」

「皆さんにお聞きます。ご自分の人生はラッキーだと思いますか？」という古市氏の問いに、参加者の 67%が「はい」、33%が「まあまあ」と投票で回答（「いいえ」はゼロ）。

古市氏は、人を雇用する際、「はい」と即答できる人のみ採用するそう。人生の谷も含めて「ラッキー」と言える強さと前向きさが重要とのことであった。

このイベントも、参加者のアンケート結果によると、9 割以上の方々が「参加して (大変) 良かった」と回答してくれた。以下は、参加者のコメントの一部である。

- 日本のニュースを見ているだけではわからないアメリカの現状や、BLM の裏側を知ることができてとても良かったです。Z 世代という言葉も初めて聞いたのですが、私と同年代の方々が社会に対して行動を起こしている事実とパワーにとっても感動しました。(学部生)
- アメリカの Z 世代の方々は、環境や差別などに敏感だということを、今回の古市さんの説明で知ることができました。凄く勉強になりました。ありがとうございます。(学部生)
- 国際人の生の声を聞かせて頂けて幸運でした。(学部生)
- このような企画が全学部に広まると良いですね。(教職員)
- ランチャタイムというのが参加しやすく、よかったです！(学部生)



図 5. Lunch Time New York (ポスター)

6. 5. その他のイベント

1 月 27 日の昼休みに開催予定の「韓国メディアと文化&ソフトパワー」(ソウ ヨニ博士: インディアナ大学) は、使用言語が英語であるにもかかわらず、100 名を超える参加申し込みがあった。BTS をはじめとした K-POP の人気は世界を席卷しており、映画「パラサイト」が今年の第 92 回アカデミー賞で作品賞を含む最多 4 部門を受賞したことからわかるように、韓国が作り出すメディア・コンテンツは国家のパワーとなっている。今年度、本学教養教育院の韓国語授業は非常勤講師の都合で不開講となっただけで、消沈した学生も多かったのではと推測される。

その他、国際交流センター主催でなくとも、海外とオンラインで結んで開催した事業が他部署で実施されている。例えば、12 月 11 日には、国の登録有形文化財でもある本学のレーモンドホールに因んだ「三重大学レーモンドホール・リモートレクチャー: ノエミ &

アントニン・レーモンド 祖父母の思い出」と題した文化的なイベントが施設部主催で開催された。米国から故レーモンド氏の孫がゲストとして登壇し、大好評であったと聞いている。12月開催であったこともあり、国際交流 days の一環としてセンター HP に掲載した。コロナ後は、当センターにおいても、上記の施設部を含め、教養教育院や国際環境教育センター、そして各学部と、積極的に連携していく必要性がさらに高まるだろう。

7. まとめと考察

7.1. 国際教育の重要性とオンラインの利点

新型コロナウイルスの感染拡大により、身体の物理的な移動を伴う留学の派遣と受け入れを担当する国際交流センターは大きな影響を受けた。同時に、先行き不透明な VUCA 時代に発生したコロナ・ショックは、国際教育の重要性と意義について再認識させる機会でもあったと言える。なぜならば、異文化コミュニケーション能力の醸成を重要視する国際教育は、学生を自文化中心主義的な考え方から脱却させ、多様性の中での協働を促すものであるからである。その意味で、国際教育のゴールは、もはや国家間の競争で勝つためのエリートを育成するというよりは、先行き不透明な時代を自らの判断と行動力で生き抜き、世界や社会が抱える喫緊の課題に取り組める人材を育成することにあるのだろう。

環境先進大学をかかげる三重大学にとっては、12月に開催した国連 75 周年記念イベントで根本かおる氏（国連広報センター所長）に助言いただいたように、国際教育としての SDGs 教育をさらに加速していく事が望まれている。そのためにも、逆に、新たな価値観が創出されていく過渡期である現在にあって、その国際教育の意義と重要性を正しく認識できない大学に持続可能な未来はないと考えられる。

本年度、本学の国際交流センターは、上記の重要性を実感していた教員（著者）が中心となって 10 以上のイベントを企画・運営・実施し、留学や海外渡航の機会を奪われた参加学生のモチベーションの低下を防ぎ、地球規模の課題を認識させ、同年代の若者たちが声を上げて行動している事実を提示することで、ある一定の刺激を与えることに概ね成功したと考えられる。国連 75 周年記念イベントに授業の一環として参加した学生のアンケートの中には、根本所長が紹介した動画やデータに刺激されて初めて SDGs に興味を持つようになった、という回答も多く見られた。

実は、国連には根本所長のご登壇を 2019 年から依頼していたのであるが、東京から三重県までの行程を考えると過密スケジュールの中での参加は困難、との回答をいただいていた。それが、4月に入って改めてオンラインでのご登壇を依頼したところ、快諾していただいたという経緯がある。このように、オンラインが持つ利便性は、海外だけでなく国

内においても、時として、主催者側、参加側双方に大きな恩恵をもたらす。

7.2. コロナ後の大学の国際化と評価

本稿では、コロナ禍で実施した（または実施予定の）国際交流センター主催のイベント（国際教育関連）を報告してきたが、コロナは高等教育機関の国際教育や国際化における評価にも影響を与えている。

イギリスの Times Higher Education (THE) 日本版は大学の教育力を重視しているが、このランキングを決定する 4 つの指標のうち 1 つが「国際性」で、「外国人の学生／教員比率、留学比率、外国語による講座の割合」から構成されている（ベネッセホールディングス, 2020）。

2008 年、文部科学省によって策定された計画の一つ「留学生 30 万人計画」は、「日本を世界に開かれた国とし、人の流れを拡大していくために重要である」（文科省、2008）として打ち出された。「大学のグローバル化に関する閣議決定・提言等」（文科省、2016）によると、「意欲と能力のある全ての学生の留学実現に向け、日本人留学生を 12 万人に倍増し、外国人留学生を 30 万人に増やす」との決定が記されている。2019 年にはその目標数である 30 万人を達成しているが、コロナ禍にあって先行きに不透明感が出ている（日経、2020）。同様に、コロナの感染拡大は、海外の大学や語学学校への留学も阻んでおり、今後「大学の国際化」を測定するための評価基準に変更を求められることが予測される。新たなウィルスの変異種が発見され、完全な終息が見えない中で、物理的な移動を伴う留学の派遣と受け入れ数値を教育機関の国際化として指標とするのは現実的ではない。

では、コロナ後、または with コロナの時代における、「大学の国際化」はどのようにして評価されるべきなのであろう。この大きなテーマについて議論する事は本稿の域を超えるので無理である。だが、コロナ禍でさらに深刻化した経済格差や高騰している航空運賃を考慮すると、移動をとまなう従来型の留学は以前よりも高価なものとなされ、代替案としてオンラインを通じての海外協定大学の学生との交流や、様々な分野のプロジェクトに共同に取り組む COIL (Collaborative Online International Learning) 型教育が文科省のサポートを受けてさらに発展していくと予測される。身体的な移動を伴わない COIL 型の国際交流や国際共修は、財政的に留学の実現が困難な学生だけでなく、移動が難しい障がい学生の多くが参加可能になるだろう。この意味で、「誰も取り残さない」「質の高い教育」という SDGs の大前提と目標を実現するものと言えよう。

7.3. Beyond 5G 時代における国際教育の標準化

今後、国際教育は5G時代の幕開けと共に加速し、国家間の地理的距離がさらに縮小していくことで、教育の国際化がスタンダードになっていくと予測される。COIL型教育が当然のように全学教育だけでなく、学部での専門教育、大学院研究室にも取り入れられる時代が来るであろう。だが、このままBeyond 5Gに突入してヴァーチャルと現実（対面）の境がさらに曖昧になっていく（総務省，2020）ことは、メディア業界におけるMega Media（巨大メディア企業）のように、大学教育におけるMega Universitiesの誕生に突き進む時代に突入していく可能性を秘めている。実際、授業料が高騰し続けている米国では、ハーバード大学のような名門私立大学だけでなく、UCLAを含む州立大学の授業料まで高騰しており、授業が支払えない学生の中には、有名大学等が安価で提供しているオンライン版授業を選ぶ者が増加している（ドキュメンタリー映画『Ivory Tower』（2014）より）。

政府がコロナで打撃を受けた社会経済や経済格差の問題解決に取り組む一方で、各大学は、到来する時代に即した教育指針を独自のビジョンと実行力を伴って推進していく必要がある。地域型貢献大学として環境教育やSDGs推進する三重大学であるが、Beyond 5G時代を見据え、情報と共に国際教育がスタンダードになると予測される世界に取り残されることがないように、着々と準備する必要があるだろう。

先が不透明なVUCA時代の中でも、自らの羅針盤を頼りに進み、人生の舵取りができる学生を育成することを目標とする国際教育。その国際教育を担う機関の役割は、世界的にもますます重要視されている。その重要性が、本学を含めた全ての教育機関に正しく認識されることを希望してやまない。

〈参考文献〉

- 荒木博行（2015年6月29日）「コンフォートゾーンとは、そこから抜け出して成長する方法とは？」『グロービス』2020年12月27日アクセス〈<https://globis.jp/article/1369>〉
- 河原田慎一（2021年1月3日）「ベネチアの水が透明に コロナ禍に浮き出た人間の身勝手」『朝日新聞デジタル』2021年1月3日アクセス〈https://digital.asahi.com/articles/ASNDT63V3ND8UHBI005.html?iref=pc_rellink_04〉
- 栗田聡子（2000）「産学官連携によるSDGs教育とグローバル人材育成事業の実践～中部国際空港協議会/県庁との海外渡航啓発事業第2弾～」『三重大学国際交流センター紀要』第15号 pp.95-111.
- 総務省（2020）「Beyond 5G推進戦略－6Gへのロードマップー」2021年1月12日アクセス〈https://www.soumu.go.jp/main_content/000696613.pdf〉

- 内閣府 (2000) 「経済財政諮問会議 (オンライン教育の重要性と課題)」 p 12. 2020 年 12 月 27 日アクセス <https://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/minutes/2020/0708/shiryu_01-3_2.pdf>
- 日本経済新聞 (2020 年 4 月 22 日) 「外国人留学生最多 31 万人 計画達成も先行き不透明」 2021 年 1 月 11 日アクセス <<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO58361130S0A420C2CR8000>>
- ベネッセホールディングス (2020) 「THE 世界大学ランキング日本版 2020 発表」 2020 年 12 月 27 日アクセス <https://blog.benesse.ne.jp/bh/ja/news/20200324_release.pdf>
- 堀義人 (2017 年 1 月 11 日) 「VUCA 時代、リーダーに重要な 4 つの言葉」 2020 年 12 月 27 日アクセス <<https://www.nikkei.com/article/DGXXKZO11343490V00C17A1X12000>>
- 堀江未来 (2020 年 10 月 1 日) 「新型コロナ禍で加速するオンラインでの学びとこれから」『立命館アジア太平洋大学 Online FD Seminar』(講演内容より抜粋)
- 三重大学 (2020) 『『THE 大学インパクトランキング 2020』の SDG 4 (質の高い教育をみんなに) において日本国内で 1 位タイにランクインしました』『大学トピックス』 2020 年 12 月 23 日アクセス <<https://www.mie-u.ac.jp/topics/kohoblog/2020/05/the2020sdg41.html>>
- 村尾 佳子 (2021 年 1 月 8 日) 「VUCA とは? 予測不可能な時代に必須な 5 つのスキルと OODA ループ」『Globis Career Note』 2021 年 12 月 23 日アクセス <<https://mba.globis.ac.jp/careernote/1046.html>>
- 文部科学省 (2020) 「今後の国立大学法人等施設の整備充実に関する調査研究協力者会議 (第 5 回) コロナ対応の現状、課題、今後の方向性について」 2020 年 12 月 28 日アクセス <https://www.mext.go.jp/content/20200924-mxt_keikaku-000010097_3.pdf>
- 文部科学省 (2016) 「資料 5 大学のグローバル化に関する閣議決定・提言等」 2020 年 12 月 23 日アクセス <https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/036/siryo/attach/1338083.htm>
- 文部科学省 (2008) 「留学生 30 万人計画」骨子の策定について」 2021 年 1 月 4 日アクセス <https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1420758.htm>
- 文部科学省 (2008) 「各大学や第三者機関による大学の国際化に関する評価に係る調査研究について」 2021 年 12 月 23 日アクセス <https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/025/gijiroku/08121011/006.htm>
- Andres, J. (2020, April 30) . Please wear a mask! Twitter. Retrieved December 27, 2020, from <https://twitter.com/chefjoseandres/status/1255671337667919872>
- NHK WEB (2020 年 12 月 29 日) 「新型コロナ 世界の感染者 8100 万人 死者 176 万人 (29 日午前 3 時)」 2020 年 12 月 29 日アクセス <<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20201229/k10012789141000.html>>
- Rossi A. (2014) *Ivory Tower. Is college worth the cost?* [Film]. CNN Films.
- Stiehm, J. (2002) . *The U.S. Army War College: Military Education in a Democracy*. Philadelphia: Temple University Press.

三重大学国際交流センター紀要 [投稿規定]

2014年3月13日改定
国際交流センター運営会議

1. (名称及び目的)

本紀要の名称は『三重大学国際交流センター紀要』とし、主として三重大学や三重県内の地域社会において実施する国際教育、国際研究、国際交流、語学教育に関わる内容の、研究論文、研究ノート、調査報告、実践報告、書評等を発表する場を提供することを目的とする。

2. (編集委員会)

三重大学国際交流センター内に、三重大学国際交流センター紀要編集委員会（以下、編集委員会）を置く。編集委員会は、三重大学国際交流センターの専任教員1名と学部選出の委員1名（いずれも任期1年）によって構成され、内1名を編集委員長とする。編集委員会が国際交流センター紀要の出版に際し、すべての責任を負う。

3. (投稿資格)

本紀要への投稿資格は、三重大学に勤務する専任教員あるいは非常勤教員であることを原則とする。但し、編集委員会が特に認めた場合はこの限りではない。

4. (原稿規定枚数)

原稿の枚数は、研究論文、研究ノート、調査報告、実践報告については、原則として13枚（1枚＝40字×32行、ただし20%の増減を認める）、書評については3枚以上9枚以内とする。図表、写真等も規定枚数内に含める。

5. (使用言語)

本紀要に掲載する研究論文、研究ノート、調査報告、実践報告、書評等は、日本語または英語で執筆したものとする。執筆の詳細は「執筆要領」に別途定める。

6. (原稿論文等の採否)

投稿された原稿については、編集委員会にて以下の審査を行った上で採否（条件付き採択を含む）を決定し、投稿者に通知する。

- (1) 投稿原稿の内容が、本紀要の発刊趣旨、対象領域に合致していること。
- (2) 投稿原稿の構成、文体が紀要にふさわしく、投稿規定に則っていること。
- (3) 未発表であること、論文作成にかかる不正がないことが誓約されていること。

尚、原稿の種別にかかわらず、当該学術領域の専門家による内容評価は行わない。

7. (投稿の受付)

編集委員会は投稿申込みおよび原稿提出の締切を定める。締切日までに提出され、採用された原稿は、原則として当該年度の号に掲載する。

8. (論文等の公開)

掲載された研究論文等は、原則として電子化し、インターネット上でも公開する。

本規定は2014年4月1日より運用を開始する。

三重大学国際交流センター紀要〔執筆要領〕

2011年6月15日改定

国際交流センター紀要編集委員会

1. 原稿は、A4用紙を使用し、マイクロソフト・ワードで作成する。

〔和文の場合〕1頁：一行40字×32行

〔英文の場合〕1頁：32行（行数のみ指定・1行の文字数は指定しない）

〔ページ余白〕（和文・英文とも）上下左右30mm

2. 注は、⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾のように本文中に通し番号を付け、脚注または後注とする。

3. 引用・参考文献は、著者名又は論文執筆者名、（当該著書刊行年又は論文発表年）、書名または論文名、出版社又は当該論文発表誌名、巻数及び頁数を記す。

【例】山田祐二（1995）『日本論』河人社

山本幸夫（1996）「日本の民間習俗」『〇〇大学紀要』vol.21、pp.30－42.

Riggs, Fred W. 1966) *Thailand: The Modernization of a Bureaucratic Polity*.

Honolulu, HI: East-West Center Press.

Psathas, G. (1986) The organization of directions in interaction, *Word*, 37 (2), pp. 54－66.

4. 原稿は、次の順序で執筆する。

〔和文の場合〕

- ①論文名と執筆者名（日本語）
- ②論文名と執筆者名（英語又はその他の言語）
- ③要旨（英語又はその他の言語で200語以内）
- ④キーワード（日本語で5語以内）
- ⑤本文
- ⑥後注
- ⑦引用・参考文献

〔英文の場合〕

- ①論文名と執筆者名（英語）
- ②要旨（日本語で400字以内）
- ③キーワード（英語で5語以内）
- ④本文

⑤後注

⑥引用・参考文献

5. 執筆者は、次のものを期限までに提出する。

①打ち出し原稿（A4用紙に印字）

②原稿の電子ファイルを記録したUSBメモリー・スティック

（USBメモリーには執筆者名を記し、ファイル名は「論文名＋執筆者名」とする）

6. 校正は、執筆者本人が再校まで行う。校正段階での内容の変更は認めない。

執筆者一覧

三重大学地域人材教育開発機構

福岡昌子 教授

松岡知津子 准教授

正路真一 助教

三重大学教育学部

富田昌平 教授

三重大学人文学部

野村耕一 准教授

三重大学国際交流センター

栗田聡子 准教授

仲渡理恵子 非常勤講師

百瀬みのり 非常勤講師

マホニー, ブライアン ジェームス 非常勤講師

編 集 後 記

『三重大学国際交流センター紀要』第16号（留学生センター紀要より通巻第23号）をお届け致します。今回は、研究論文3本、研究ノート1本、調査報告2本、実践報告6本、合計12本となりました。海外の教育論から言語学、外交政治思想、外国人教員の招聘事業、留学生の就職支援など、多岐にわたる充実した内容となっております。

記録すべきは、2020年度が、新型コロナウイルスの感染拡大より、世界的規模で教育機関が甚大な影響を受けた「オンライン元年」となったことです。特に国際教育部門が、意識・行動レベルで大きな変革を求められる中で、本学国際交流センターも、オンラインやオンデマンドを介した新たな国際教育・交流の可能性を探り、実行してまいりました。3本は、その新たな試みについて報告しています。

次年度も国際交流センターホームページにて論文を掲載して参りますので、引き続きよろしくお願い申し上げます。

（栗田聡子・正路真一）

三重大学国際交流センター紀要 第16号（通巻第23号）

2021年3月31日 印刷

2021年3月31日 発行

編集委員：栗田聡子（国際交流センター）
正路真一（地域人材教育開発機構）

発行者 三重大学国際交流センター
〒514-8507 三重県津市栗真町屋町 1577

印刷所 伊藤印刷株式会社
〒514-0027 三重県津市大門32-13
TEL 059 (226) 2545 FAX 059 (223) 2862

BULLETIN

OF

CENTER FOR INTERNATIONAL EDUCATION AND RESEARCH

MIE UNIVERSITY

Vol. 16

Contents

Articles

- Acceptance of Christmas culture and Santa Claus myth in China ... TOMITA Shohei (1– 16)
A Semantic Analysis of *Semete* NAKATO Rieko (17– 32)
About the usage example of the interjection “Uun” in Japanese texts ... MOMOSE Minori (33– 48)

Research Notes

- The Statements as diplomatic remarks by the Prime Ministers of Japan
..... NOMURA Koichi (49– 64)

Research Reports

- 他者の為の悟り：菩薩と即身仏 ブライアン ジェームズ マホニー (65– 76)
遺跡の今昔 ブライアン ジェームズ マホニー (77– 89)

Practice Reports

- Acceptance of Foreign Teachers on Short-Term Invited Programs to Promote Mutual
Exchange Centered on Japanese Language Education FUKUOKA Masako (91–103)
Presenting Mie Regional Culture in English for American University Students:
A Virtual Exchange Project in a CIER/CLAS class, “Mie Studies” SHOJI Shinichi (105–117)
Presenting Mie Regional Culture to Students in Another Prefecture:
A Virtual Exchange Project in a CIER class, “Japanese Culture I” SHOJI Shinichi (119–132)
Effects of Internship on International Students’ Motivations to Work in Japan: Post-internship
Questionnaire Research SHOJI Shinichi, FUKUOKA Masako, MATSUOKA Chizuko (133–142)
What Companies Require for International Students:
A Questionnaire Research with Companies that Accepted International-Student Interns
..... SHOJI Shinichi, FUKUOKA Masako, MATSUOKA Chizuko (143–157)
The Importance and Challenges of International Education under COVID-19 From the Practice of
“International Exchange Days 2020, Connecting with the World through Online”
..... KURITA Satoko (159–176)
Information on Subscription of the Bulletin (177)
Instruction to Contribution (179)
Authors (181)
Postscript by the Editor
-

CENTER FOR INTERNATIONAL EDUCATION AND RESEARCH
MIE UNIVERSITY

2 0 2 1